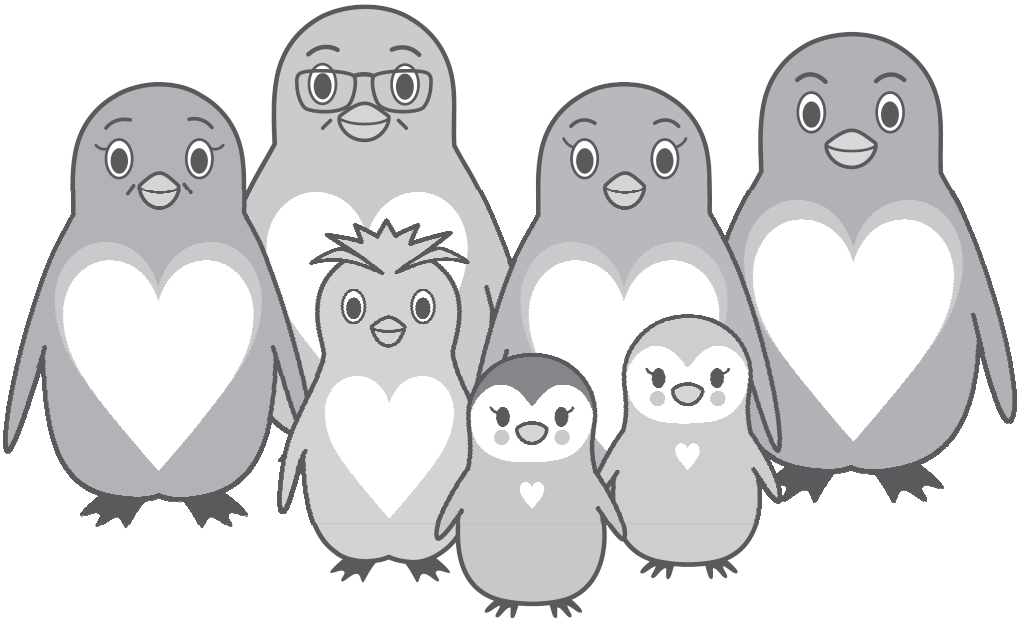
養育家庭（里親）体験発表集
（令和3年度）



東京都里親制度普及啓発キャラクター

「さとぺん・ファミリー」

東京都福祉保健局少子社会対策部

「養育家庭（里親）体験発表集」の発行に当たって

都内には、様々な理由により親元で暮らすことのできない子供が約4,000 人います。そのような子供を、自らの家庭に迎え入れ、家庭的な環境で育てているのが「里親」であり、東京都ではその制度の普及に取り組んでいます。「養育家庭」は里親制度の一つであり、養子縁組を目的とせず、一定期間子供を育てる家庭です。

毎年、東京都は各区市町村と協力し、都内各地で養育家庭（里親）体験発表会を開催しています。この冊子は、令和３年度に開催された体験発表会において、養育家庭（里親）の皆さんに発表していただいた内容を要約し、冊子にまとめたものです。

養育家庭（里親）になろうと思ったきっかけ、里親宅で生活したことのある児童の委託されていた時の思い、交流・委託中の思いがけない出来事や慌ただしい日々の様子などが描かれています。

また、委託後の子供の赤ちゃん返りなどの問題や実子と委託児童の関係、子供を途中から育てることゆえの悩みについても語られています。

しかし、そういった御苦労の中にも、子供が少しずつ家庭になじんで心が通じ合っていくのが実感でき、養育家庭（里親）をやっていて良かったという話や、悩んだ時に養育家庭（里親）仲間や児童相談所の職員など周りの人から支えてもらった話など、養育家庭（里親）だからこそ味わえる子育ての素晴らしさにも触れています。

より多くの都民の皆様にお読みいただき、都内における養育家庭（里親）に対する理解を深めていただく契機になれば幸いです。

令和４年９月

東京都福祉保健局少子社会対策部育成支援課長
榎　本　　光　宏

目　　次

1．交流の中断を経て感じた気持ちの変化・・・・・・・・・・　2

2．絆・・周りの人たちといいつながりを持ちながら・・・・・・　6

3．養育に必要なことは全て子どもが教えてくれる・・・・・　8

4．両親の病気を通して感じた子供の持つ命の輝き・・・　12

5．子どもたちとの生活の中で広がる世界・・・・・・・・・・・　16

6．どんな時も見守って、受け入れてくれる里親・・・・・・・　20

7．里親をすることはごく自然な流れ・・・・・・・・・・・・・・・・・　22

8．焦らず子供とじっくり心を通わせていく・・・・・・・・・・・・・　24

9．子育ては「暴れ川の治水工事」・・・・・・・・・・・・・・・・・・　26

10．養育家庭が寄り添い続けた時間・
子どもの大きな成長・・・・・　30

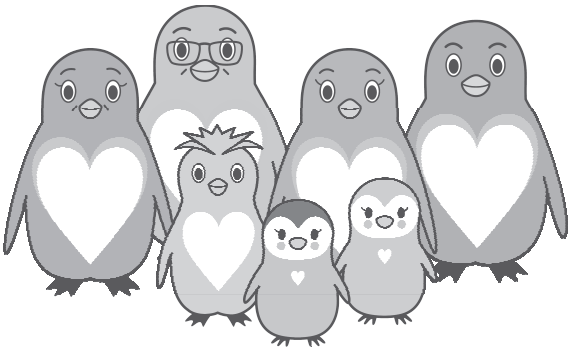
11．里親になれた喜び・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　34

12．帰ってくる場所になれたら・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　36

13．数か月間の里親委託で変わったその後の生活・・・・　40

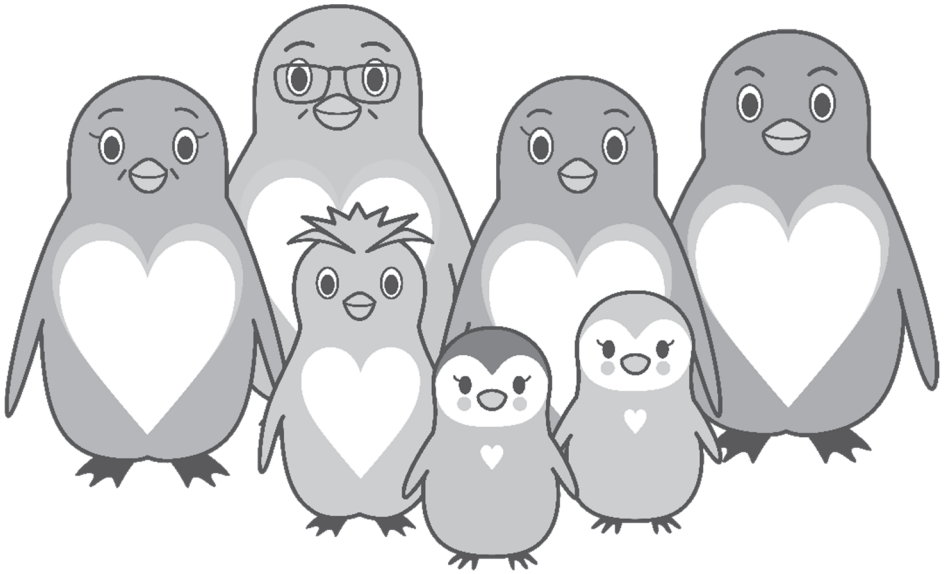
14．『初めての里子を迎えて』
～家族と共に成長しています～・・・・・・　44

15．体験発表会アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　48



この体験発表集には、14 組の
養育家庭（里親）の方たちの
養育体験がつづられています。

養育家庭（里親）体験発表会に、ようこそ！！



この度は、体験発表集を手に取っていただき、ありがとうございます。

本書は、令和3年度の養育家庭（里親）体験発表会の発表者の方々のご協力のもと、当日の発表内容を要約し、編集したものです。

より多くの方々に、里親制度を知っていただき、ご理解と共感を得られることを、何よりも願っています。

それでは、里親さんと子供たちの生活の一部をご覧ください。

１「 交流の中断を経て感じた気持ちの変化 」

発表者：里親（４０代女性）

家族構成：里親、委託児童（４歳女の子Ａちゃん）、委託児童（３歳女の子Ｂちゃん）

里親歴：４年

今日は二人の姉妹を我が家に受け入れるまでの交流期間のエピソード、特に最初に受け入れました現在４歳のＡちゃんとの交流期間を中心にお話ししたいと思います。

まず私が里親になってみようかなと思い始めたのは、2016年の春頃だったと思います。実子がいないので、子供との生活というものを少し経験してみたいとか社会貢献になる事をしてみたいとか、そんな思いから里親というものにたどり着きました。

初めて児童相談所に電話をしたときは、大変緊張したことを覚えているのですが、丁寧に対応してくださいました。その後、たくさんの段階を踏んで、実際に里親として登録されたのが、約１年後のことでした。登録した後は、いつ頃子供が来るのかなと楽しみに待っていました。しかし、当初予想していたよりも長く紹介を待つことになり、少し焦りもありました。そのようなとき、先輩の里親さんとのおしゃべり会に参加して、いろいろと励ましていただいたことで、とても助けられました。

そして待ちに待った初めての子供の紹介があったのが、登録してから10か月後のことでした。夫と話し合った結果、残念ながら条件が合わないということでお断りし、その後の２回目の紹介もご縁が無くてお断わりさせていただいたので、しばらく紹介はないのかなと思っていたところ、忘れもしない2018年７月上旬に我が家の電話が鳴りました。電話がリンとなった瞬間に、私は「ああ、これで決まった」と直感が働きました。電話を取ったところやはり児童相談所の方からのお電話で、その時紹介していただいたのが、今我が家で暮らしていますＡちゃんになります。

Ａちゃんは当時、乳児院で暮らしていまして、初めて会うことができたのは、８月下旬になります。初めて会ったＡちゃんの印象は非常に薄いものでした。特別にかわいいとも思いませんでしたし、ドラマチックに運命を感じたとか、そのようなことは全くありませんでした。ただそのときに、Ａちゃんが担当の保育士さんを輝くような笑顔で見たんですね。その笑顔を見て「Ａちゃんは担当の保育士さんが大好きなんだなあ」と思ったことが、とても印象に残りました。

その日以降、交流期間というものが始まるのですが、この期間が、後にも先にも一番精神的にきつかった時期でした。Ａちゃんは当時１歳で、とても人見知りでなかなか懐かな

いとは伺っていたのですけれども、こちらの想像をはるかに超えるぐらいの警戒心でもって、激しい拒否、拒絶というものに遭いました。とにかく我々が行くだけで泣き叫ばれる日々が続きました。そんな状況でしたので、Ａちゃんと仲良くなれる日なんて本当に来るのだろうかと、職員さんの前で涙を流してしまったこともありました。満身創痍で交流を続けてきましたが、11月の下旬ついに限界が来て、私の心はポッキリと折れてしまいました。そして私は、乳児院に面会に行くことをやめてしまいました。

日課のような乳児院通いをやめて時間ができたので、落ち着いて今までのことをいろいろと振り返ってみました。当時Ａちゃんは１歳。たった１歳の子供が、実のお母さんの元を離れて乳児院に入り、そこで担当の保育士さんを頼りに、集団の中で精いっぱい生きてきたわけですよね。そこに見ず知らずの私が入ってきて、突然仲よくなりましょう、一緒に暮らしましょうと言ったところで、Ａちゃんにとっては、今までの自分の生活が足元から崩されてしまうという恐怖でしかなかっただろうと思いました。誰だって、慣れ親しんだ人や場所からは離れたくないですよね。私はそれまで、自分が大変、自分がしんどいと自分のことばかり考えていましたが、本当に一番大変だったのはＡちゃんだったんだと、あの小さな体で精一杯自分を守ろうとしていただけなんだと、そんなことにやっと気がつくことができました。そして大人の都合で住む場所や養育者がコロコロ変わってしまう社会的養護の子どもというものは、なんて不憫なんだろうと思わずにはいられませんでした。

そんな時、乳児院の担当の方より「もう一度来てもらえませんか」とお電話をいただきました。もう少し行ってみて、状況が変わらなければ、そのときはこのお話を断ろうと思いながら、12月2日に夫と一緒に面会に行きました。久しぶりに面会したその日から、Ａちゃんの様子も変わってきまして、少しずつ落ち着いて交流できるようになりました。そして12月７日、もうその日のことを私は大変よく覚えているのですが、初めてＡちゃんが、私を見て笑ったんですね。私を指さして、満面の笑みで私を見てくれました。その笑顔は、８月に初めて会ったとき、Ａちゃんが大好きな保育士さんを見た時の笑顔と全く同じものでした。そしてその日抱っこしたところ、足を私の腰にぐっと巻きつけて、上半身もぴったりくっつけて、ぎゅうっと力強く私に抱きついてきました。一度面会をお休みした事が、かえっていい結果を招くこととなり、その日から一気に流れが変わりました。

12月末頃には、面会を終えて帰ろうとする私たちに対して、後追いするような様子も見られ、その後はとんとん拍子に話が進みまして、年明けから我が家にＡちゃんが遊びに来たり、お泊まりに来たりして、2019年2月から長期外泊になり、その日から今日まで、２

年７か月ずっと一緒に暮らしています。

暮らし始めた当時は、慣れない子供との生活に心の余裕がなく、淡々と毎日の日課をこなしていました。ところが、一緒に暮らし始めてから１週間が過ぎた辺りから、私の心境に変化が現れてきました。もうＡちゃんのことが、かわいくてかわいくて、たまらなくなってしまったんですね。体の奥底から湧き上がる愛情というものは、私が今まで経験したことがないものでした。それ以来、私は彼女を産んでいないということは、すっかり頭の中から消えて、里子だとは普段考えることがなく、毎日子育てをしている状態です。Ａちゃんは、私たち夫婦をとても幸せな気持ちにしてくれる存在となりました。

さて、ここからは二人目のＢちゃんのお話です。Ａちゃんには、Ｂちゃんという実の妹がいまして、年齢は１歳違いです。二人は別々の乳児院で暮らしていましたので、お互いの存在を知らないまま育っていました。Ａちゃんが我が家に正式に委託されてから３か月が経ったときに、児童相談所の方から、Ｂちゃんを引き取って欲しいというお話がありました。「姉妹といえども、別々の場所で育てば、結局は他人になってしまう。二人が将来支え合って生きていくためにも、二人を姉妹として一緒に育ててほしい」と言われました。夫と何度か話し合った結果、Ｂちゃんを受け入れる方向でお返事をしまして、2019年の９月からＢちゃんとの交流が始まりました。家族３人の暮らしを始めてから半年後に、また交流というものを経験することになりました。交流中私は年子の姉妹の子育てを本当にできるのだろうかと、随分悩みました。最終的に私の背中を押してくれたのは、お向かいに住んでいた奥様が、年子の男の子を育てた方で「家の中に大人が二人に子供が一人よりも、大人と子供二人ずつの方がバランスがいいよ。年子は子供同士が一緒に遊んでくれるから、かえって楽だよ。」と話してくださいまして、その言葉がストンと私の胸の中に落ちたんですね。それで心を決めました。そしてそのお話は、今現在そっくりそのまま現実のものとなっています。

2020年2月に、Ｂちゃんは我が家に長期外泊に入りまして、そのまま今日まで１年７か月一緒に暮らしています。一緒に暮らしてからのＡちゃんとＢちゃんは、初めから仲良くできた訳ではありませんでした。Ａちゃんの立場からすると、Ｂちゃんが来るまでの１年間、私たち夫婦の愛情を独り占めしていたところに、自分の立場を脅かす大変なライバルが出現したわけです。Ｂちゃんの立場からすると、もう既に出来上がっている３人家族の中に入っていって、自分のポジションを作らなくてはいけない。お互いに必死な訳ですから、喧嘩も日々ヒートアップしていきました。

初めの頃は、Ｂちゃんがやられっぱなしでしたが、そのうちやり返すようになりまして、家の中は毎日子供たちの泣き叫ぶ声が響いていました。ちょうどコロナによる初めての緊急事態宣言と重なっていた時期だったので、誰かに家に来てもらうこともできず、児童館も閉鎖、公園の遊具は使えない、買い物も子連れでは行きづらいという状況の上に、慣れない４人での生活で、全ての歯車がかみ合っていないような状態に、私のストレスもたまっていきました。

子供たちの喧嘩もどう対処していいのか分からず困っていたのですが、ある日、子供たちもある程度ぶつからないと、お互いに納得いかないだろうと思いました。ここは、とことんぶつかる時期だから仕方がないと開き直り、無理に仲よくさせようと思わない事にしましたら、少し気が楽になりました。そしてとことんぶつかって遠慮がない関係になった今現在の子供たちは、朝起きてから夜寝るまでずっと一緒で、お互いがかけがえのない存在になっていることを実感する日々です。色々ありましたけれど、二人を引き取って良かったと今は心からそう思っていますし、彼女たちがこれからの人生を助け合って生きていってくれたら、こんなに嬉しいことはありません。

子供と一緒に暮らし始めてからのこの２年７か月というものは、本当に充実した幸せな日々でした。そして、彼女たちが自立するまでは、私たち夫婦も元気でいて、彼女たちの成長を見届けようという新たな目標もいただきました。そして私は、彼女たちの生きる力を信じています。それはなぜかと言われても言葉では説明できませんが、きっと大丈夫だといつも思っていますし、彼女たちの人生に幸多かれと、心から願ってやみません。そんなふうに思える存在がいるということに、感謝の気持ちでいっぱいです。里親制度といいますと、大人が子供を支える制度のように思われるのですが、うちの場合は、私たち夫婦が子供たちからたくさん支えられて、助けてもらっていると思う毎日です。

私は何の取り柄もない平凡な人間ですが、こんな私をママと呼んで必死に付いてきてくれる二人には、感謝しかありません。私が幼稚園に迎えに行くと、彼女たちは満面の笑顔で走ってきて、私に抱きついてきます。そういうときに、私はいつも思うのです。もし、里親制度というものがなければ、彼女たちは一体誰に向かって走っていくんだろう。誰が彼女たち受け止めてあげるのだろうと、考えずにはいられません。今日、この場にいらっしゃる方が、里親をやってみよう、一歩踏み出してみようと思ってくださいましたら幸いに思いますし、一人でも多くの子供を受け止めてあげられる存在が増えてくれることを、私は心より願っています。

２「 絆・・周りの人たちといいつながりを持ちながら 」

発表者：元委託児童（２０代女性）

家族構成（当時）：里親、委託児童（たくさん入れ替わり）

里親宅で過ごした期間：乳児～２０歳

私は、今年の春に美容の専門学校を卒業して、今、特別養護老人ホームに就職しています。仕事は介護士です。メイクの仕事を目指していましたが、コロナ禍になり、希望するところの採用がなくなりました。入所者の方にメイクをしたり、ネイルをしたりもしてあげたいなという希望もあったので、この仕事を選びました。

うちのおばあちゃんもメイクをしてきれいになると、とても喜んでくれたなっていう思い出もあります。しかし、本当にもう仕事は大変です、とにかく大変です。覚えることもたくさんあるし、つらいこともたくさんあります。想定外の展開に戸惑いました。仕事をするということの大変さを毎日感じています。でも、もちろんやりがいも感じています。時々つらいことや本当に嫌なことがあると、ため息が出るし、転職サイトに目が行きます。でも、お姉ちゃんたちも、友達も、そんなこと誰にだってあるよって言葉で伝えてくれたり、行動で表して励ましてくれたりするので、それで気持ちを切り替えるようにしています。学生時代とは本当にあまりに違う日々を送っています。

今度、うちの施設のハロウィンの行事に、私の家族の太鼓チームが、演奏しに応援に来てくれます。本当にめっちゃ楽しみです。

私は、もう常にママと一緒でした。ママの行動力は多くの人が知るところですが、それにより、私もかなり有名人でした。例えば幼児の頃、中学校に行くと、職員室や校長室が遊び場で、先生たちからお菓子をもらったり、遊び相手をしてもらったりと、校長先生のことは学校じいじと呼んでいたり、本当に何かいつも引き出しにお菓子を入れて待ってくれていました。ママはＰＴＡ会長で忙しくしていましたが、そのおかげでいつもたくさんの人にかわいがってもらいました。

うちの特徴は、たくさんの子供たちが、入れ替わり一緒に暮らしてきたことです。両親の里親生活の中で、一番長く一緒にいたのが私です。ですから、私はほとんどの人と一緒に暮らしています。

我が家の自慢は、みんな本当に仲がいいことです。家を出た人たちとも、今もずっと仲よしです。また何といっても、パパが自慢です。多分こんなパパはいないと思います。どんなときも優しく受け入れてくれるし、一緒に遊んでくれるし、映画や旅行も大好きで、

どんなにばかなことも一緒にやってくれます。こうあるべきだとか、もっとこうしろとか、全く言いません。うちで暮らした人は、みんな本当にパパが大好きです。友達のお父さんの中でも人気のパパです。私は、パパから穏やかな気持ちで生活することを学んだと思います。

そして、ママは本当に人脈がすごいです。私たちにたくさんの人をつないでくれました、たくさんの体験をさせてくれました。赤ちゃんの頃お世話になった方など、私の関係の人を、今でもずっと大切にしてくれています。

今日は、この会場に私が乳児院の頃から知っている人や、幼稚園の頃を知っている人や、たくさんの里子、里親さんたち、たくさんの人が来てくださっています。私たちは、みんな大きな愛の中で育ちました。私だけじゃなくて、ほかの兄弟も、家にいなくても、みんな大きな愛の中で育ててくれたって言ったほうがいいのかな、育ててくれました。

私はこの間二十歳になりました。二十歳になって、氏の変更をしました。細かい手続は弁護士さん等に任せて、最後に、家庭裁判所に弁護士さんとママと一緒に行きました。「〇〇（里親の姓）さんですよね」、「はい」それで終わりました。通称名ではなく、本名になりました。ようやくパスポートも、戸籍も、住民票も、全てが里親の姓になりました。もう使い分けはしなくてよくなって、何か一気に楽になったというか、落ち着いた気がしました。

私を生んでくれたお母さんとは会えませんが、お母さんも妹も元気に暮らしていてほしいです。会えないけど、私を生んでくれて、今の家族や友達に出会えてよかったなって思っています。

そして、６月から、私は一人暮らしをしています。思ったより良かったことも、よくないこともあるんだけど、いつも後ろで守ってくれているという気持ちが常にあります。

里親家庭でも、里親家庭じゃなくても、何だかんだ子供はちゃんと育ちます。すごくありがたいなと思って、成長するし、感謝するっていう気持ちも持って成長するし。だから、これからも周りの人たちといいつながりを持ちながら、みんなで幸せになりたいなって思います。

３「 養育に必要なことは全て子どもが教えてくれる 」

発表者：里親（４０代男性）

家族構成：里親、委託児童（小学校低学年男の子Ａ君）

里親歴：３年

現在、里親登録して３年目、そして、子どもが委託されてから、ちょうど２年経ちます。里親になったきっかけは、妻がこの分野の研究者であり、妻の両親が都内でファミリーホームを育んでいたことです。ファミリーホームとは、５～６人の子どもが委託されている養育家庭のことです。私自身は里親制度について無知だったのですが、妻の実家の子どもたちの成長を見たり聞いたりする機会に恵まれました。実子がおらず、かといって子どもが欲しい気持ちもありませんでしたが、里親制度には興味を持ち、やってみたいと思うようになりました。血縁関係にない他人同士が歩み寄って互いを受け入れ合っていくこと、ゼロからスタートして親子関係のような固い絆を築いていくことを目の当たりにして、心が揺さぶられました。

里親制度は、養育者が親権者になるのではなく、育てられない実親さんの代わりに、一時的に家庭で子どもを預かることで、そのことも自分にとってよく考えるきっかけになりました。養子縁組とは違い、親権者になるわけではなく、委託される場合も長期委託、短期委託があり、ずっと一緒にいられる保証もない。他人同士が本当の家族のように、お互いを受け入れ合う、すごく難しいことに思えて、でもそれが実際にできるのを見て、すごく価値のあることだと思いました。今振り返ってみると、やりたくなった一番の大きな理由になっていると思います。

その後、里親になることを決心するわけですけれど、最初は自信がありませんでした。なんとなく、里親登録を意識してから、実際に登録するまで１５年以上かかりました。不安だった点が大きく分けると二つありました。一つ目が、他人を家族として受け入れることについて、果たして自分にそれができるかということ、二つ目が、養育の面で手がかかって大変だということでした。

では、それらをどう整理していったかといいますと、一つ目について、よくよく考えると、誰の周りにでもある人間関係と同じじゃないかという考えに落ち着きました。職場、家族、友人との関係において、関係が上手くいくときって、相手への優しさとか思いやりとか、相手の意見を尊重するとか、相手の立場に立って物事を考えるとか、それと同じことだなと。委託された子どもの気持ちになって考える、子どもの意見や意思を尊重する、

本質的には、どこにもあるただの人間関係と同じなんだなと理解しました。また、必ずしも親子関係という固定概念に縛られる必要はないと考えています。子どもと養育者とでコミュニケーションを積み重ねていって、お互いにとって一番心地よい関係を築いていくことができれば、それでいいんじゃないかと思っています。

二つ目については、自分の中でネガティブな印象で溢れかえっていたのですが、長い時間をかけて養育家庭を知るうちにとポジティブなものと捉えられるようになっていきました。子どもから出る態度とか行動、そういったものには必ず理由があって、大変な面だけ切り抜いて見ると、辛い、大変って思うんですけれども、実は、それが後々子どもの成長に必要なプロセスだったりすると気付きました。

十数人の子どもが成長していく過程を見るなかで、里親に甘えたい感情、子どもの持つ怒りの気持ち、不安や不満を全部出し切って、里親にそれらを受け止めてもらった子というのは、自立の段階になってすごく落ち着いて、豊かな大人に成長していきました。反対に里親に正直な自分を出すことができない子は、小さいうちはあまり大きな問題が起きないけれど、自立の段階になって、不安定になってしまうケースがありました。そこから私が学んだのは、手がかかることは決して悪いことではなく、子どもの明るい未来に繋がっていくということ。また、子どもがありのままの自分を出すということは、この里親なら全てを受け止めてもらえると信頼している証拠だと思います。こうして、養育の大変な面を、むしろ必要なことと前向きに理解するようになりました。こうして、私の中で不安となっていた点は解消されていきました。

次に、実際に里親になってみてどうだったか、体験談をお話しします。私の場合、里親登録をして、その数か月後には児相から子どもの紹介を受けました。小学校低学年の男の子Ａ君で、私との相性もよかったせいか、すぐに委託が決まりました。現在、一緒に住んで２年ちょっとですが、とにかくかわいいですね。奥さんと「実子でもこれほどかわいいと思えるのだろうか」と言い合うほどです。先日雨が降った日に、彼が学校からカッパを着て帰ってきたのですが、家の中からモニターで見て、「あ！Ａ君がカッパ着てる！かわいい！」と二人でドアを開けるのも忘れて盛り上がっていました。

そんなＡ君が、なぜ養育家庭に来ることになったかといいますと、育児放棄されたことが原因です。幼稚園、学校へほとんど通わず、家でずっと過ごしていたようです。眠くなったら寝て、起きたいときに起きるという生活だったようで、一緒に暮らしてみた時に思ったのが、時間の概念がないということでした。あとはゲームの仮想な世界に浸っていた

ようで、ゲームのキャラクターを、本当に実在すると思っていた様子でした。また一番大変だったのは、社会性が十分に育まれていなかったため、意思の疎通がなかなかとれなかったことです。言葉のキャッチボールができないので、いくら能力的に問題がなかったとしても、学校で学んだところで何も伸びないのではと心配でした。

またＡ君は、じっとすることができない発達障害のような面や、不安なときに、耳や目を塞いで大声を出して暴れます。それらについて、最近、私が思っていることは、子どもをよく観察していれば､子どもから養育に必要なことを全て教えてくれるということです。例えばＡ君の場合、情緒面がとても幼くて、自分のことを赤ちゃんだと思っています。同級生にはほとんど目をくれず、赤ちゃんが映るCMがテレビで流れると、散々、赤ちゃんを侮辱し、「オレが一番かわいい」と張り合います。私は、それはＡ君にとって必要なこと、たどれなかった成長のプロセスを赤ちゃんに戻って、やり直そうとしているのではと考えています。

里親として私ができることは、それに理解を示して、受け止めることではないかと、考えています。つまり、子どもが里親に対して遠慮や我慢をしないで、ありのままの自分を出すことができる、そのような環境や信頼関係を築き上げていくことが大切だと、子どもから教えられています。ストレスを発散せずに内側にため込んでしまったら、それはとても不健康なことで心理面での病気につながっていくと知られています。虐待についても同じで、心理的な影響があるなら何らかの形となって外に出るのは当然のことではないでしょうか。むしろ、積極的に発散させてあげる必要があると思います。例えば、仲の良い友人が落ち込んで泣いていたら、「その泣き方は異常だから病院に行って薬を処方してもらったほうがいい」とは言わないですよね。「気が晴れるまでたくさん泣いたらいいよ」といった言い方をするのではないでしょうか。

反対に、虐待を受けたにもかかわらず、学校でも、家庭でも手がかからない、いい子にしているとしたら、それは私にとって危険信号です。養育面では楽かもしれませんが、思春期や自立の段階で、そのしわ寄せが来る可能性があります。そうなってしまったら大変です。赤ちゃんに返ってやり直すことはもうできません。だから幼少期に手がかかることについて、とても良い兆候と捉えるようにしています。養育の苦労に対して後ろ向きになるのではなく、未来への投資だと思うことにしています。

自立という言葉が出ましたが、実は私にとって、養育する上で自立は常に大きなテーマです。なぜなら、過去の経験から子どもたちが、自立する段階で、自立し切れず苦しんで

いる姿を見るのが私にとって非常に辛いことでした。やはり、子どもたちには、少しでも自分の足で立って自分の人生を楽しんでほしいという願いがあります。

自立心が育っていくにはどうしたらよいか。この点についても子どもが教えてくれました。Ａ君が今、私と妻に最も求めてくることは愛情を独占することです。他の子には目を向けないでほしい、自分だけを見てほしい、自分だけに愛情を向けてほしい、と大胆に、あからさまに求めてきます。機会ある度に何度も何度も愛情を確かめようとします。毎朝、登校前に時間ギリギリまで私の膝の上で甘えます。安心を得ることによって登校することができるのです。愛情が子どもの自立心を養い育てることは誰の目にも明らかです。私が心がけていることは、かわいいと思ったときにそれを心に留めるだけにせず、言葉にして伝えたり、抱きしめたり、なでてあげたり、具体的に気持ちが伝わるように工夫して接しています。

本来なら、私のほうから率先してやらなくてはいけないことですけれども、Ａ君のほうから１日に何度も何度も、「好きだよ」って言ってくれるんですよね。なので、私はそれに対して返すだけ、もう本当に子どもから教わってばかりです。優先すべきことは学校の勉強よりも、まずは子どもに愛情を伝えること。お腹いっぱいになるまで、十分に満たされるまで愛情を与え続けることを最優先して養育に向き合っています。

そんなＡ君ですけれども、１年前くらい前から少しずつコミュニケーション能力が向上していて、会話のキャッチボールができるようになりました。学校の集団生活にもついていけるようになり、次から次へと言葉を吸収し学んでいます。本当にのびのびと楽しんで生活していると実感しています。学校での様子について、先生からもよい報告を受けています。感心するのが、家ではじっとしていられないのですが、学校では静かに、きちんと座って授業を受けているんですよね。なので、外では頑張って、家庭では休んで発散するというバランスが、今のところ、よい感じでとれているのかなと思っています。

しばらく前までは、朝ランドセルを背負って、玄関を出た後も、何度も戻ってきて、「好きだよ」と言ってハグを求めたり、愛情を繰り返し確認してから学校に行っていました。最近は、玄関を出るとこちらを振り返らずに行ってしまいます。一歩一歩ですけれど、ゆっくり、着実にＡ君の自立が始まっていると感じています。最後に、養育に必要なことは子どもが全て教えてくれる。里親としてできることは、子どもがありのままの自分を出せる環境をつくること。将来できる限り子どもが自分の足で立って、自分の人生を楽しんでいくことができるように意識して、日々を子どもと向き合っています。

４「 両親の病気を通して感じた子供の持つ命の輝き 」

発表者：里親（５０代男性）

家族構成：里親、委託児童（小学２年生女の子）

里親歴：５年

私は登山が好きです。登山は、天気が大きなポイントになります。今から３年前になりますけれども、長野県の白馬岳に行きました。当日の朝、麓まで行ったら、小雨が降っていました。さてどうしようかという話になったのですが、頂上近くの山小屋に電話をしたら、上は晴れていますよという話でした。それじゃあ登ろうかということになったんです。みんなでかっぱを着て、小雨が降る中、登山を始めました。

大体登りが６時間ぐらいかかり、そのうち２時間ぐらいは、夏でも雪が解けないで大雪渓もあり、雨の降る中なのでとても寒いんですね、真夏だったんですけれども。霧、ガスも出てきて、視界は全くきかないという状況で、かなりきつい登りになったんですけれども、一緒に行った仲間たちと励まし合いながら、何とか山小屋まで登っていったんです。

その夜に天気が回復し、翌朝、その山小屋から出たら、すばらしい景色が待っていました。３６０度、本当にすばらしい大パノラマ、北アルプスの山々が見えて、遠くの山まで見えて。下のほうにはずっと雲海が広がっていました。その大自然のすばらしい景色を見たときに、仲間と一緒に、本当にここまで登ってきてよかったねというふうに喜びを分かち合いました。本当に変化に富んでいるんですけれども、山のいろんな面を見ることができた、すばらしい思い出に残る登山だったかなというふうに思います。

里親をやっていてどうですかと質問されたら、山仲間にであれば、白馬岳登山だねというふうに答えることができるんですね。それは、変化に富んだ、すばらしい山旅ということになると思います。

里親になることを考えたきっかけですが、私たち夫婦には子供がありませんでした。それで、妻が早い時期から里親制度に関心を持っていました。その後、知り合いの里親をやっている方と交流を持つようになったんですけれども、その方は３人の里子、男の子たちを育てていました。小学校高学年と中学生です。私もその家に何度か行って様子を見たんですが、正直、これは本当に大変だなというふうに思いました。それと同時に、すごい働きだなというふうに思ったんです。

その子供たちを見ているうちに、実際にこんなふうに社会的養護を必要としている子供たちがたくさんいるんだという現実を知りました。その後、何とか私たちの家庭も、少し

でも役に立てないだろうかということで、妻と相談をして、話を進めようかということになりました。

委託されるまでの交流ですが、乳児院との交流ですね。期間は６か月ぐらいになったと思います。少し長いなというふうに感じたんですけれども、個人差があるのかなというふうに思います。妻は週３回行って、私は土曜日に行きました。土曜日には、３人で手をつないで、乳児院の施設の周りを散歩しながら、公園で遊んで、帰ってきて、乳児院のプレイルームで遊んで、昼ご飯を食べて帰ってくるというプログラムでした。一緒に遊ぶ中で、時間をかけてゆっくり親しくなっていったということでした。

委託日が決まって、最後の日に乳児院からアルバムを５冊頂いたんですね。そのアルバムには、乳児院に預けられた、生まれた月からの写真がたくさん入っていました。その写真に、一つ一つ担当の方からの温かいコメントが書かれていました。この子はこの乳児院で、すごく大切に愛されて育ってきたんだなというのを感じることができました。アルバムの最後のほうで、交流期間の私たち夫婦の写真が載せられていました。娘は、今でもアルバムを見るのが大好きで、ずっと眺めながら、やがて私たちが出てくると、ここで父さんと母さんが出てくると喜んでいます。施設から里親に移行することが、アルバムの中でつながっていて、非常にありがたかったかなというふうに思いました。

委託後の家庭の変化ですが、生活は、本当に大きく変わったなというふうに思います。基本的にものすごく元気で明るくて笑顔のかわいい、女の子です。ただし、泣くとかんしゃくを起こすんです。特に夜にかんしゃくを起こすことがよくありました。夜なかなか寝つかなかったです。１時間たっても、２時間たっても寝つかないんです。

それで、妻のほうが車でよく連れ出して、寝つくまでその辺をドライブするんです。大体交代なんですけれども、次の夜は私がだっこしながら近くを散歩して、電車を見ながら、今日は１時間コースかな、今日は２時間コースかな、なんて思いながら過ごしていました。大体委託から７か月から８か月ぐらいは、そういう状況が続いたと思います。でも、少しずつですけれども、その時間が短くなってきました。

試し行動の話ですが、事前にこんな試し行動がある場合がありますというふうに研修で伺っていたんですけれども、それは一通りあったかなと思います。それも激しく表れていたなと思います。具体的な話だと、物をぶちまけたり、わざとお漏らしをしたり、親が嫌がるいろんなことをやるんです。あるときは、妻が出かけていたとき、娘が服を着てソファーに座っていて、おしっこ出たと言うんです。ソファーの上でお漏らしをしたんです。

じゃあ着替えなと言って着替えさせたんですけれども、少し経つと、またやったと言い、結局このとき、５回ぐらいお漏らしをしました。

私も事前にそれを聞いていましたので、ちょっと根くらべのような感じになって、そのときには冷静に対応できたんです。ただし、私にもコンディションがあって、疲れているときとか、つい感情的になってしまうことがありました。感情的になって対応すると、いいことはないですね。本当にいい結果はないです。そんなときは、私は庭の草むしりをしながら、ひたすら反省をするんです。自分は忍耐がないなと。とにかく心を広く持って受け止めてあげることが本当に必要なんだなというのを学びました。試し行動も少しずつ少なくなっていきました。

ただ、そんな行動を見ていると、こんな小さな子が試し行動しなくちゃいけないという現実が、すごく悲しいなというふうに思いました。そして、この子は本当に安心できる場所を求めているんだなというふうに感じましたね。なので、なるべくたくさんだっこやスキンシップをするように心がけました。

話は前後するのですが、委託が決まる前に、将来的なことも考えて、妻の両親と同居を始めていたんです。ですから、私たち夫婦と両親と、あとかわいい猫１匹です。５人と１匹の生活が始まったということになります。

少し経ってから、両親が二人とも癌にかかっていることが分かり、二人とも余命宣告を受けてしまったんです。医者からは、あと１年ぐらいでしょうというふうに言われました。子育てと両親の介護が重なってしまったので、特に妻のことを心配しました。両親とも在宅の医療を受けたいというふうに希望していたので、専門の在宅ホスピスの先生に来ていただくことになったんです。それからは、毎日いろんな人が出入りするようになりました。お医者さん、看護師さん、ヘルパーさん、入浴サービスのスタッフの方々ですね。本当に病院のようになったんですけれども、でもその中で、娘はそういう人たちとすぐに仲よくなり、友達のようになるんです。お医者さんからは、聴診器を借りてあなた将来医者になりなさいと言われて、使い方を教えてもらっているんです。そんなふうに、半分は父母を診てくださって、半分は娘を見てくださったような、そういう雰囲気でしたね。

最初は、家庭の中が暗くなるんじゃないかとすごく心配していましたが、元気で明るくて、よくしゃべり、よく動く好奇心旺盛な一人の女の子の存在が、いつも家の中を明るくしてくれ、笑い声が絶えなかったなというふうに思いますね。子供の持っている命の輝きというのは、本当にすごいなというふうに、そのときに実感しました。この子がいてくれ

て本当によかったなというふうに思いました。

その後、母が先に亡くなり、半年後に父が亡くなりました。その少し後に、娘が荒れて不安定になったんです。理由がよく分からなかったのですが、妻が子ども家庭支援センターの先生に相談をしたんです。すると、今まで一緒に生活していたおじいちゃんやおばあちゃんがいなくなってしまった。今度はお母さんやお父さんもいなくなる、そういうことを多分心配しているんだと思いますというふうに言われました。

そこで妻が娘に、お母さんもお父さんもどこにも行かないよ、ずっと一緒だよと言ってあげたんですけれども、それから安心したのか、落ち着きましたね。娘がそんなことを考えていたというのは、私たちは全然分からなかったので、やはり専門家のアドバイスというのは、すごく大切だなと感じました。その後も、子ども家庭支援センターからのアドバイスをいろいろいただきましたけれども、とても助けになったなというふうに思います。

あと、ネットワークの大切さですけれども、これは本当に子育てする中で、いろいろなところとつながっていることが、すごく大切だと実感しています。具体的には、もちろん児相、支援機関、子ども家庭支援センター、特に里親同士のつながりが、大切だなと思います。妻は何人かの里親と交流を持って、一緒に遊んだり、あとお母さんたちといろいろ話して、情報交換をしているんですけれども、それはとても励まされて力になっています。

久々に会う里親さんから、この子本当に成長したね、お姉さんになったね、と言われると、やっぱり親としては非常にうれしいですし、励まされますね。ですから、里親さんとの交流というのは、すごく助けになっている、支えになっていると思います。

娘は小学校入学前に発達障害、ＡＤＨＤの診断を受けたんです。１年生のときから、普通級に在籍をして、週２時間だけ通級での支援授業を受けています。本人はその授業はとても気に入っていて、楽しみにしており、よかったなというふうに思っています。

これからも、いろいろなことが出てくるだろうなというふうに覚悟はしているんですけれども、雲に包まれて先が見えなくなるようなこともあると思うんです。でも、仲間と励まし合いながら、一歩一歩進んで、また違ったすばらしい景色に出会えるんじゃないかなというふうに思っています。

里親の働きを考えるときに、一人の人の人生の子供時代の本当に大切な時期に家庭に招き入れて、家族として一緒に生活をするということです。これがとても価値のある大切な働きだというふうに思っています。私の周りにも、もっともっと里親家庭が増えてほしいというように願っています。

５「 子どもたちとの生活の中で広がる世界 」

発表者：里親（６０代男性）

家族構成（当時）：里親、委託児童（文章中Ｍちゃん、など）

里親歴：１６年

里親になるということを、どこで決めたかというと、単純で、妻が児童養護施設の保育士であったために、子供を見る妻の言葉をいろいろ聞いていたわけです。私が４６歳か７歳の頃、妻のほうが、実子もいましたので、それでも養子縁組で一人欲しいと言い始めたわけですね。私はすぐそれは現実のものとしては考えておりませんでした。ただ、２人で話しているうちに、養子縁組里親をやってみようかということで、最初は養子縁組里親のトライをしたわけです。しかし、このトライは不調に終わりました。

ただ、そのままで終わりというわけではなく、それじゃあ里親というものをやってみようかというのが、妻のほうからありました。それで、当時はまだサラリーマンをやっていましたので、実感がなく、実の子供がいるのに里親という選択肢はなかなかないわけです。

私は当時、業界最大手のサラリーマンだったんですね。かなり稼いでもいましたけども、今で言ったら、本当にブラックですね。朝６時半ぐらいには出ないと間に合わないと。それで、帰ってくるのが、早くて夜１０時。遅ければタクシー帰りというのが連日続くわけです。こんな私ですけれども、なぜか管理者にさせられまして、そこの課長でずっとやっていたものですから、本当に体調はどんどん悪くなりますね。そうすると、これは自分には起きないだろうと思っていたことが起きて、ある日突然、片目をつぶれば歩けるんですけど、両目だと歩けないんですよ。医者に行って、ＭＲＩを撮ったり、いろいろやってんですけど、原因は分からないと。

もちろんそれなりに、だんだんは治ってはきたんですけれども、このままいったら自分の体が耐えられないだろうということで、４７歳から４８歳ぐらいにかけて、妻に「今の会社を辞めたいと」と言って、そしたら妻は、簡単に一言で「いいよ」と、言っていただきまして、辞める方向にいきました。ただし、そこに変な言い方かもしれないですけど、落とし穴があったんですね。正直な話。４９歳の３月ですね、年度末で辞めました。そうしたら何と、Ｍちゃんがくっついてきたんです。

嫌だったわけではないですよ。ただ、妻は働いていますね。私は仕事を辞めました。そうすると、どうなるでしょう。誰が面倒を見るか。当然私ですよね。それまで家のことなんて大してやってこなかったサラリーマンが、突然、女の子を見る羽目になったんです。

大体想像はつきますよね。そうすると、もう自分にとって、すごいストレスでしたね。会社とはまた違うストレスですけれども、すごかったですね。もうつらかったですね。はっきり言って、半年間は。実際には１年以上つらかったですね。

今でもしっかりと覚えていますよ。Mちゃんが来て、最初に言ったこと。「●●さん、嫌い」というのが連日、毎回のようにずっと続くんです。そのとき心の友だったのは、昼寝です。昼寝をしてくれたときは、大体１時間ぐらいは寝てくれるのでほっとするんですよね。これはもう早く寝ろ、早く寝ろと思ってました。スイミングに通わせて、泳がせて、疲れさせて早く寝させようということもやったんですけどね。

でも、それだけで済まないですね。まだ「●●さん、嫌い」でしたから、ずっと１年以上。もうこっちもこれ以上は耐えられないと。どうしようと、保育園に入れようと。ところが、皆様も分かるとおり、保育園って共稼ぎですよね。そうすると入れない。幼稚園じゃ短いので、近所の方のところでパートで働き始めて、何とか保育園に行ってもらいました。

そうすると、やっぱり精神的にもかなり楽になり、精神を落ち着ければ、子供に対する見方もだんだん落ち着いてくるので、ちょっとずつ関係性は良くなってきたかなというのがありますね。そんなふうになりながら、いつの間にか、１人よりは２人、２人よりは３人、３人でも４人でも変わんない。現実的には、最終的には４人、受けたんですけれども、今２人預かっております。それぞれのことを言ったら、時間なんてあっという間に過ぎてしまいますので、里親になって一つよかったことを改めて申し上げたいと思います。

一般的に、会社を辞めて、今、私６５歳です。もし妻と２人の生活だったら、どんな生活だろうねということをしょっちゅう話すんですね。そうすると１日がどういう動きをしているのか、大体想像がつくと思います。ところが、ここに小さな子供がいるとどうでしょう。そんなことをやっていられる暇はありません。ということは、やっぱり精神的にも、肉体的にも若くいられるというのが大きいですね。

まず自分の子供と違って、やはり人様の子供、ちょっと言い方が変ですけれども、預かっているという感覚でいると、やはり事故があってはいけないし、愛情をもって育てなきゃいけないということも当然ながらありますので、やはり元気でいなきゃいけないです。働いているときには、血圧も体重も若干ずつ上がっていたんですね。ところが辞めて、落ち着いてきて、体型も保っていられて、生活に潤いが出て、いいものかなと思います。

あと、子育てという点でいきますと、我々夫婦だけでは育てられないですね。それぞれ

がそれぞれの役目を果たしている以上に、地域とのコミュニケーションやいろんな活動、そういったことがとっても大切なことだと思います。そういう方々がいっぱいいたので、私たちは子供がここまで育ってくれたのかなと思っています。それに本当に感謝しています。特に男である私は、それほど近所付き合いがあるわけではないので、サークルなり、個人でもいい、いろんな方と会話ができるということが、今でも大変助かっております。ぜひ、孤立しないで、いろんな方々にお話をして、助けを求めるということは大切かなと思っております。もちろん児童相談所の方々にも、かなり迷惑をかけて、言いたいことを言いながら、ああだこうだと言いながらやってきました。ちゃんと対応していただいて、ここに至っているということですね。いいことばっかりじゃないですけどね。

Ｍちゃんは、もともとは他県の児童相談所の担当でした。それが、あるいろんな理由で東京のほうに委託ということで、家へ来たわけです。ですから、里親担当は東京ですけれども、子供の担当は、当時他県でした。ですから、いざ行こうとすると、車でも１時間以上、２時間かかるぐらいのところを結構行ったり来たりしました。実母との再会に対しては、なかなかうまくいかなくて、これがうまくいったのは、彼女が高校３年生のもう秋ですよね。秋になってやっと実母との面会がかなったということで大変でしたね。相当遠いところまで行ったり来たりして、夕方５時に行って帰ってくるだとかというのを結構やりました。

これからちょっとお話しするのは、このコロナ禍で、結構困ったんですね。皆さんが思う以上に困る。まず彼女は、まだ成人年齢に達していないんですね。そうすると、まずアパートの契約が簡単ではないですね。私のサインだけでは借りられなくて、実母のサインが必要なんですよ。これは結構大変なんですね。それプラス、今こういったところにいる人たちは、まだ里親という制度が分かるからいるのかなという感じですけれども、広く一般には里親は分かりません。

ちょっと話がそれちゃいますけど、去年のちょうど今頃ですよ。今、高校２年生、高校１年生の女の子がアルバイトをするために、通帳を作るために、ある金融機関へ行きましたが作ってくれないんです。何を持っていけばいいか、何が必要かというと、里子という証明、要するに措置された証明があるわけですね、それと、あと、一般的に皆様が使っている健康保険証というのが必要なんです。

ところが、里子は健康保険証を持っていない子が多いんです。東京都の場合は、東京都が発行する受診券というのを持っています。ところが、某金融機関の副支店長は、これは

健康保険証じゃないので通帳を作れないと聞き入れてくれませんでした。何が言いたいかというと、まだまだこの里親制度というものは、知っている人が数％でしょうというレベルです。

ちょっとまた話がずれちゃいますけど、約１６年前ぐらいＭちゃんが、私の住んでいる市に住民登録をしようとしました。どのぐらいかかったでしょう。一般的に、住民移動するのに、せいぜい１５分ぐらいで大体済みますよね、でも２時間以上かかりました。

Ｍちゃんの場合、そういう形でアパートも、いろいろやって、何とか契約までこぎ着けました。何とか住めるようにはなったんですけど、まだ困っていることがある。彼女は、まだ成人じゃないですから、契約ができない。例えば、皆さん携帯電話、スマホを持っていますよね。彼女の携帯はまだ名義は私です。なぜかというと、彼女は持っているお金がないんですよ。だから審査が通らないんですよ、未成年で。これは家族だったら通るんですね。

だからそういうことで、このコロナ禍において、いろんなところで彼女はすごく不利益を被っている。彼女が巣立つときには、行政からお金が出るんですね。就職支度金というのが。ただし、これはすごくハードルが高いんです。とにかく基本的に正社員じゃないと出ない支度金なんですね。だから、彼女にはお金が一切いかないということなんです。これ結構困る大問題なんですね。こういった困った子供たちがいっぱいいるんだよということを改めて、私としては言いたいです。今は、我々がいるから彼女は困ったと言えば、何とかやりますけれども、これが不調で、我々からもし飛び出たような子だったらば、どうだっただろうか。改めて思うことです。

困ったこともいろいろあったんですが、とにかく最後を締めくくると、里子を持って私は幸せだなと思っております。小学校５年生のときに痛い目に遭いましたからね。なぜか、今の高校２年生の女の子も小学校５年生のときにやりましたし、今家にいない男の子も小学校５年生のときにやらかし、今いる家の小学校５年生も、また何かやったし、とにかく小学校５年生はすごいですよね。面白いぐらいやっていただけるので、いい思い出というふうにして捉えればいいのかなと思っております。とにかく人生は一度きりと思っていますので、少しでも楽しい時間を過ごせたらいいかなと思っております。

６「 どんな時も見守って、受け入れてくれる里親 」

発表者：元委託児童（２０代女性）

家族構成（当時）：里親、委託児童（実子、他の委託児童など）

里親宅で過ごした期間：２歳～１９歳

まず自己紹介させていただきます。５月頃に１９歳で家を出て、一人暮らしを始めました。今は居酒屋の社員をやっています。

養育家庭に委託されたのは、２～３歳のときです。あまり覚えていないんですけど、仕事に行く里母をはだしで追いかけて、里父に捕まって家まで連れ戻されたのが、一番古い記憶です。自分が里子だというのを結構小さい頃から聞かされていて、自分が里親と血がつながっていないことも気にしたこともなく過ごしていました。

中２から中３の頃に、思春期、反抗期を迎えて、将来のことや進路を考えなくてはいけない時期で、そのとき何になりたいとかがなくて、自分の中でもちょっとは考えていたんですけど、それを表に出ていませんでした。でも里父、里母に、将来何がしたいのかとか、高校はどこに行くのかとか、看護師になったほうがいいというのを言われていました。

私、勉強が嫌いで、高校卒業しても、専門とか、大学に行こうと思ったことがなくて、働いています。見た目も自由なほうがよくて、ピアスだったり、髪の毛もめちゃめちゃ染めていたり、それで、看護師も無理だしというので、里親と対立していました。これは別に、血がつながっていないからとかじゃなくて、ただ、言ったらどうなるのか分からなかったから、あまり言わないほうがいいかなと思っていて、言えずにけんかみたいになってというのが続きました。里親の二人は、常識人過ぎて、頭が固いというか。私がここにこう進めという道を示してくれるけれど、そこに行きたくないんですよ。外れたくて。

本当に息が詰まる、ずっと合わないと思っていたんです。本当に真逆ですね、性格が。高校に通い始めるまで話合いも全然できなくて、今まで言ったことがないんですけど、この人たち頭かった（固い）、うざいと、ずっと思っていたんです。高校に入って、結構自由な高校で、テストもなくて、授業は受けなきゃいけないんですけど、国語の授業でクラスの人と意見交換をするという場がたくさんあって、そこで自分の意見の伝え方や、話し合うというのを学んで、そこから家でも自分の意見が言えたり、伝えることができるようになりました。里親も聞いてくれるようになって、そこから、自分の気持ちを話せば、分かってくれる。ちょっと今まで息が詰まっていた家も、何か楽しくなって過ごせました。

高校１年の終わりぐらいに、友達との関係でいろいろあり、学校に行きたくない時期が

あって、そのことも話して、高校を辞めて中退という道を取るか、高校卒業の資格は欲しいから高校を変えるか、今の学校で保健室登校にするかという話し合いをしました。私はイベントが大好きで高校の行事とかはやりたかったから、それを話して、高校を変えて、通信の高校に行って、ちゃんと高校を卒業して、今があります。

現在、コロナの時期にちょうど一人暮らしを始めて、お金もなくて、また家に戻らなきゃいけないところでしたが、里親さんが手伝ってくれたり、お金を出してくれました。家にテレビがなくてつまらないという話をしたら、言った三日後ぐらいにテレビが届いたんですよ。迷惑しかかけていないんですけど、本当に感謝の気持ちでいっぱいなんです。私のことを戻さずに育ててくれたこと、学校で私が悩んでいるときもちゃんと話を聞いてくれたり、こういうこともできるよという案をくれたりというのをしてくれたおかげで、ちゃんと卒業もできました。家を出る前は、頑なに「絶対に頼らない」とか言っていたのに、頼りまくっちゃって、月一ぐらいで私の一人暮らしをしているところの家に二人で来るんですけど、それがうれしかったりして、結構楽しみなことの一つです。

今まで触れてこなかったのですが、二人が動いてくれて、児相にも言ってくれて、実母とも今ＬＩＮＥとかでつながれています。自我が芽生えたときぐらいから、実母に会いたいというのをずっと言っていましたが、進展がなくて、中学生ぐらいのときからはもう諦めていたんですけど、１８歳で児相との関係が切れるとなって、会っておいたほうがいいということで会えました。最初、めちゃめちゃ緊張していましたが、特に何か感動の再会というわけでもなくて、この人が実母なんだみたいな感じで１回目のときは終わりました。その後に、２～３回ぐらい会って、いろいろ私と離れていたときの話をしてもらって、実母と何もぎくしゃくせずに話せたり、関われているんだなと最近思っています。なので里親さんが動いてくれて本当にありがたかったし、会えてよかったのです。実母とはご飯とか行くぐらい仲はよくて、こうやって実母とも仲がよくて、里親との関係も全然悪くなっていなくて、今まで以上によくなっている気がします。

何かそういう感じで感謝してもしきれないですね。家を出て離れてみて分かることとか結構あると思います。自分が実際に一人暮らしをしたいと言っていて、実際に一人暮らしをした人とかは、結構寂しくなるとか、戻りたくなるって言われていたんですけど、私は、この距離感がちょうどいいのかなと、逆に思っているので、これからもこのぐらいの距離感で関わっていけたら、お互いに楽かなと。でも、甘えるところは、ちゃんと甘えていこうかなと思っています。

７「 里親をすることはごく自然な流れ 」

発表者：里親（４０代女性）

家族構成：里親、実子（３名）、一時保護児童（１５名ほど）

里親歴：３年

養育家庭に登録したのは３年前の夏で、その冬から現在まで、一時保護の委託を受け入れておりますので、本日は一時保護の里親としてお話をしたいと思います。

まず、里親をしていて一番困ること、これはあくまで私の場合ですが、登録前から現在に至るまで、避けては通れない質問、「なぜ里親をやろうと思ったのですか」。この質問は、何年経っても答えに困るし、一言で言い表せず、いつも悩んでしまいます。

私は二十歳前後で、養護施設で育った友人と出会うまで、日本に養護施設があること、そして入所している子供の多くには、実の親御さんがいることを知らずにいて、すごく衝撃を受けました。一番初めのきっかけはそこですが、以後、２０年以上、様々なきっかけと呼べるような小さな出来事が積み重なっていきました。

自身も結婚し、子供を育て、少しだけ一息ついたときに、ふと、今始めなければと思ったんです。子供を育てるには結構な体力、気力が必要で、そろそろ私の歳的に、ぎりぎりだなと、本当にある日突然思ったんです。今始めなければ、１０年後、２０年後に私は間違いなく後悔する。私はそんな後悔はしたくない、その気持ちを家族に伝え、受け入れてもらった、これが最終的に私の背中を押した出来事でした。

養育家庭をやっていると人に言うと、人格者だと思われがちですが、ひいき目で見ても、私は至って普通の人です。また、子供がとても好きなんだねと言われますが、特別子供が大好きというわけでもありません。むしろ、大人と子供なら、大人のほうが好きなくらいです。となると、じゃあ何で里親やってるのと聞かれ、また困ることになるのです。本当に私にとってはごく自然なことで、道で泣いている子供がいたら、どうしたの？と手を差し伸べますよね、そんな普通のことの延長上にある、特別な理由がないことなのです。

さて、なぜ一時保護の里親をしているかですが、一言で言えば、向いているからです。まず、一時保護の委託は多くの場合、昼過ぎに打診の電話がかかってきて、その日の夕方から夜には里子が家にいたります。家族は、学校や仕事から帰ってきたら、前触れもなくいる、そのことについてストレスを感じたり、心の準備も必要とせず、受入初日から実に普通に生活をしています。私たちがそんなだからか、里子も何日も経たずに、何年も前からここにいたようななじみ方をしています。

受託中、児童相談所の担当の方などが、大丈夫ですか？と電話をくださるのですが、正直なところ、これといって困ることはなく日々を過ごしています。むしろ、初めて委託を受ける前にしていたあの覚悟は何だったのだと思えるほどで、実に平和な毎日です。

私は登録時には、長期の養育家庭を希望していましたが、たまたま初めての委託が一時保護でした。そのときに、保護所は常に定員ぎりぎりなのに年々保護は増えているという現状を知り、少しでもその手助けがしたいと、しばらくは短期専用でと児童相談所にお伝えし、何人かお預かりしているうちに、私たちには短期委託のほうが向いているのだなと気がつきまして、以来、２歳から１１歳の子供を、主に２週間から１か月間、時には３か月間に及んだお子さんもいましたが、３年間で１５人、お預かりしています。

私がここまで無理なく、ある意味こんなに気楽に里親を続けていられるのは、周りの人たちにがっちり支えられているからです。いろいろな人が、自分にできることはと考え、手を貸してくれようとします。その気持ちが温かく、よし頑張ろうと思わせてくれます。

一時保護の子供を預かると、養育者が常に一緒にいなければいけない決まりがあるのですが、私はパートで事務の仕事をしています。３年前、一時保護の里親をやっていこうと決めたときに、仕事との両立は無理だと考え、好きな会社、仕事ですが、迷惑をかけることになるので退職を申し出ました。すると、話を聞いた上司の方が、それでもよいと言ってくれて、以来、委託があれば、明日から休みます、期間は分かりません。委託が終了すると仕事をする、そんなわがままな勤務が許されています。本当にありがたいです。

さて、家に来る子供たちは、どの子も至って普通の子供ですが、年相応の知識がなかったり、行儀が悪かったりすることが多いので、私は日々の挨拶、朝起きたらおはようって言うんだよから教え、年相応の当たり前のしつけをし、食べたことのないものを食べさせたり、いろいろな場所や物を見せ、体験させる、知らないことは教える、そうやって、短い期間だけど、せっかくうちに来たのだから、その小さな手に、一つでも多くのものを持って帰ってもらいたいと願いながら、日々を過ごしています。

最後に、里子たちは私に何をくれるのか。それは思い出です。あの子は元気かなと考えると、それぞれの思い出がよみがえり、楽しかったこと、あの子はこんな面白いことをやったなとか、言ったなとか、あんなうれしいことを言ってくれたなとか、どんどん増えていって、その思い出が私の心を、人生を豊かなものにしてくれています。

もし、皆さんの中で、里親に少しでも興味がある方がいらっしゃれば、ぜひその手を少しだけ伸ばして、私たちと里親仲間になっていただければと思います。

８「 焦らず子供とじっくり心を通わせていく 」

発表者：里親（６０代男性）

家族構成：里親、委託児童（現在：高校１年生と中学２年生の男の子）

里親歴：１６年（幼児～高校生、一時保護含め２０人以上）

私たちは１６年前､施設にいたＡちゃんと委託に向けて､５か月ほど面会を重ねました。初めて面会をしたとき､施設の子供たちが､私と家内を囲み､寄ってきてくれるんですね。そして､「ねぇ、Ａちゃんのお客さんなの？」と聞いてきました。最初、どうしてそのような質問をしたのか、気づきませんでしたが、実は子供たちは、できれば私たち夫婦が自分のお客さんであってほしいという思いを持っており、私たちにアピールしているように見えてきました。そう感じた妻は、できればこの子供たちを皆預かって育てたいとその場で泣いたんです。えー、私には絶対にそんなことは思えない。今まさにＡちゃんを、初めて預かろうとしている立場なのに、この子供たち皆なんてよく思えるなと妻のその心に、感じ方にすごくびっくりしたんですが。でも、考えてみたら、その思いが１６年ずっと続いてきたことで、今まで里親をさせていただけているのかもしれません。

そんな、妻の思いが通じたのか、幼稚園の卒園式の日から正式に委託となりました。私は、Ａちゃんの幼稚園には一度も行ったことがなかったのですが、初めて卒園式の日に、幼稚園の担任の先生から「里親さんと交流するようになってから、Ａちゃんは変わってすごくいきいきとしている。とても明るくなった」と言われました。えー、私たちと会っているときは相変わらず、ほとんどしゃべらないし、あんまり笑ったりもしてくれなかったのに、幼稚園ではそんなに変わってたんだ。Ａちゃんの心が少し明るくなったと、幼稚園の先生が感じてくれていた。すごくうれしいなって思ったのをよく覚えています。

子供たちは生活だけでなく、自分の人格形成に関わる人間がどのような人たちなのかということを本能的に感じ取っています。常に自分のほうを向いてくれているのか、優しく安心できる人なのか、このような思いを強く感じました。

最近は、中学生、高校生を中心にお預かりすることが多いのですが、ある程度自分というものが確立されていて、心を開いてくれるまで時間がかかります。まずは挨拶、おはよう、こんにちは、ただいま、行ってきます、おやすみなさい、などの言葉がけを心がけ、単なる下宿屋にならないようにと思い、愛情を持って積極的に子供を育てていきたいと接していても、思うようにいかないのが、養育だと思っています。愛情豊かに育ってくれるようにあまり焦らず、ゆっくりと心を通わせていきたいと思います。

里親をしていると、大変なことや辛いこともありますが、大きな喜びもあります。中学２年生から高校卒業するまで、育てた男の子がいます。今は結婚して二人の子供がいますが、生まれるたびに来てくれます。この子が、高校３年生最後の３月に、我が家で巣立ちパーティーを開いたときにくれた手紙を読ませていただきます。私の宝物になっています。

「お父さんへ。4年間本当にありがとうございました。初めて里親さんのところへ行くと決まって、少し不安でした。家で里親さんを見て、二人ともすごく優しそうな顔をしていたのでとても安心しました。中学3年生の4、5月は体調を崩してしまい、お父さんには車で病院などよく連れて行ってもらいました。また、部活の道具を車で一緒に探してもらったりして、申し訳なかったです。今思うと、それは自分にとって大切な思い出の一つになっています。高校生になってから、入学式に寒い中来てくださって感謝しています。また、駅の近くの定食屋さんで、カツ定食を注文して一緒に食べたことを、すごく覚えています。お父さんが作ってくれた生姜焼きは、今まで食べた生姜焼きの中で一番おいしい生姜焼きでした。お父さんとは部活などで毎日朝と夜に挨拶するだけで、日常的に会話することが少なかったと思います。ですから、最後の最後に、お父さんともう一人の3人の旅行で、お父さんの思い出が強く残ってうれしかったです。バザーやお餅つきなどの行事に誘ってもらえてうれしいです。本当にありがとうございました。」

最近、里子にとっては辛い、私にとってはすごく反省させられた事件が起きました。その事件の処理について、私は日頃、児童相談所は、チーム養育だと言っているのだから、こんなときこそと思い、少し不満を抱いてしまいました。それは、里親であるあなたがすることだと無言で優しく教えてくださったのです。私は、養育の委託措置通知を受けたその日から、その通知を子供に見せて、「里という字はついているけれど、今日から私はあなたの父親だから呼び捨てにするよ。今日から父親だからね」と言って自分の覚悟を確認するのですが、そのときの私は人任せにしようとしている。自分の子供のことだったら、人に任せることなどはないのに。自分の本心に気づかされてしまいました。こんなに優しく、自分で気づくように指導してくださる児童相談所に感謝です。頭ごなしに言われていたら、もっと不満が募ったかもしれません。この歳になって、里親として少し成長できたかもしれません。ぜひ皆さんにも一緒に里親になってみませんか。何らかの理由で、本当は育てたいのに育てられない実親さんから預かって育てさせていただける、本当にありがたいことだと思います。

９　子育ては「暴れ川の治水工事」

発表者：里親（４０代女性）

家族構成：里親、実子（大学生）委託児童（小学１年生Ａちゃん）

里親歴：６年

我が家が里親になったきっかけは、長女の同級生が里親家庭をしており、そのお宅にかわいい２歳の女の子が里子としてきたことです。そのとき、長女が、うちにもかわいい２歳の女の子が来てほしいと言ってきたことが始まりでした。

ここから里子の次女をＡちゃんと呼びます。Ａちゃんが我が家に来て、５年が経ちました。新しい環境に慣れるまで大変だったと思います。でもたくさん頑張ってくれました。昨日できなかったことが今日できるようになり、どんどん成長していく姿にたくましさを感じています。Ａちゃんは明るくて元気、何にでも興味を持ち、チャレンジ精神旺盛です。そんなＡちゃんから、私たち家族もたくさんパワーをもらっています。

Ａちゃんがやりたいと言ったので、４歳からレスリングを習っています。あふれるエネルギーをレスリングで全放出するＡちゃんを見ていると、本当にすがすがしいです。レスリングを始めて、特にいい点が二つあって、一つは、Ａちゃんが落ちつきました。幼稚園に通っていた頃、戦いごっこは駄目、お友達を押しちゃ駄目と言われ続けてきましたが、レスリングを始めて、そういったことはなくなりました。二つ目は、コーチに思いっきり甘えられることです。レスリングのコーチなので、Ａちゃんが思いっきり体当たりしてもびくともしません。今、Ａちゃん２３キロありますが、コーチはひょいと片手で持ち上げて、肩車、抱っこ、おんぶ、何でもしてくれます。練習が終わると、今日も頑張ったねと、いっぱい遊んでくれます。甘えと発散の両方ができて、すごく満たされた顔をしています。

私は里親になったとき、子育てを楽しむと決めました。大変なことがあっても、オセロをひっくり返すように、その中でよかったことを見つけていこうと心がけています。去年の年末に、Ａちゃんは鉄棒から落ちて、右腕の骨を折りました。全治３か月のけがをさせてしまったことに私はとても落ち込みました。でも、気づきがありました。Ａちゃんは、骨が折れても泣きませんでした。そして、ぽっきり折れた骨を処置するとき、痛そうにしていたものの、我慢していました。お医者さんからは、「痛みに強いのは一つの才能です」と言われました。後日、入院したのですが、先生に「手術のとき、好きな曲を流してあげるね」と言われたそうで、Ａちゃんは、手術室に入るとき、「鬼滅の刃の曲にしてくださーい」と、ごきげんで入っていきました。痛みにも強いけれど、心も強いんだなと改

めて分かりました。Ａちゃんのことで落ち込み、Ａちゃんに励まされる、そんなことの繰り返しで、私もだんだんとたくましくなってきました。

Ａちゃんは我が家に来たころ、誰にでも甘え、自己主張が強く、人が多いところで興奮する傾向がありました。人や物に対しての独占欲も強かったです。乳児院で子供３人に対し、一人の保育士さんという環境の中で育ったので、甘えたい気持ちを満たしたいと思うのは当然だと思います。今はこういったことはなくなってきました。

４歳の誕生日に、Ａちゃんに、産んでくれたお母さんは他にいるんだよと伝えました。初めは受け止めてくれなかったものの、「私はお母さんのお腹から生まれてきたんだよね」と聞いてきました。「お母さんはＡちゃんのことを生んでいないけれども、Ａちゃんこと大好きだし、宝物だよ」と答えています。お母さんから生まれたかったと言うときは、「そうだよね。お母さんのお腹から生まれたかったよね、お母さんも生んであげたかったよ」と言って、抱きしめています。「誰から生まれたかよりも、これからどうやって楽しく生きようか、考えたほうがいいよね。やりたいことたくさんしようね」と先輩の里親さんから聞いたことをＡちゃんにも伝えています。毎年、誕生日には、産んでくれたお母さんに、こんなにかわいく元気に産んでくれてありがとうと感謝をしています。

周囲には、里子であることを知らせず、里親の姓で生活しています。Ａちゃんを預かるタイミングで引っ越しをしたので、近所の方たちは何の疑いもなく、親子だと思っています。そんなわけないのですが、Ａちゃんはママ似だねと言われています。Ａちゃんには、実名を使ってもいいんだよと、中学校に上がるときにどうしたいと聞くから、また、一緒に考えようねと伝えています。

Ａちゃんは、新規の場面に弱く、落ち着かなくなるという傾向があったので、１年前から入学の準備を進めていました。小学校のことが事細かに写真つきで載っている「小学生になったら図鑑」という本を見つけ、Ａちゃんと一緒に、教室風景や給食の様子などを見て、予習をしました。学校に電話したところ、放課後なら自由に見学していいですよと言ってくださったので、Ａちゃんと校内を見て回ることができ安心しました。

Ａちゃんの１週間のスケジュールが、こんな感じです。朝６時半に起き、夜は８時半ごろに寝ます。土曜は、毎週朝の７時からおじいちゃん、おばあちゃんたちと一緒に地域清掃に参加しています。土曜と日曜の午前中は、お勉強をします。早く終わると、次のフリータイムの時間が長くなるので、頑張ってやっています。フリータイムは、今日は夫がいたので、お医者さんごっこをやっていました。夫がいないときは、お姉ちゃんと一緒に録

画したテレビを見たりしています。日曜の午後は図書館に行きます。その後マンションのお友達、男子二人と外で遊びます。汗まみれ、泥まみれになって遊び、帰ってきたらお風呂に直行します。そして、夜ぐっすり眠り、また１週間が始まるというサイクルです。

Ａちゃんは、私の忍耐の先生です。私のいらいらの原因は、担任の先生からの電話、お友達の親への謝罪、言うことを聞かないので、しつけが行き届かないなどです。

ある日、Ａちゃんが泣いて帰ってきたときがありました。どうしたのと聞くと、お友達のお守りを引っ張って壊して、お友達のママが来ているということでした。お友達は同じ小学校の６年生で、Ａちゃんのことをかわいがって、お世話をしてくれている子でした。事情を聞き、誠心誠意、謝罪をしました。お友達のお母さんは、Ａちゃんの行動が少し変だと引っかかったので、訪ねてきたと。やめてというのに引っ張って壊して、謝らない。謝ってくれたら、娘も許したのに、Ａちゃんは次のお守りも壊してやると言ったと聞きました。わざと困らせることをして、相手が自分をどこまで許してくれるか、試したのです。そのお母さんは信頼できる方だったので、Ａちゃんが里子であること、愛着の問題があることをお話ししました。お友達もとてもいい子で、泣きわめくＡちゃんに、「また、学校で一緒に遊ぼうね」と優しく言ってくれました。

学校生活では、課題が次々に出てきました。先生から「Ａちゃん、何時に家を出ていますか。毎日ぎりぎりに教室に入ってきます。朝寝坊したと言っています。授業中おしゃべりをして、声が大きいので、周りもざわついています。そして、先生、先生と言って甘えてきます」と電話がありました。まず、Ａちゃんに確認をしました。どうして学校に行くのが遅れるのと聞くと、お友達に誘われて、松ぼっくり拾いをしていたと。寄り道が原因でした。授業中、甘えたくなったり、おしゃべりをするのは、不安からくるものなのかなと思いましたが、授業妨害ではあるので、授業中は甘えない、おしゃべりもしないよと言いました。先生も理解をしてくれて、休み時間には、Ａちゃん、よしよしとハグをして、落ちつかせてくれていました。以前、研修で習ったごほうび表の存在を思い出し、Ａちゃん、授業中、甘えない、しゃべらないができたら、この表に１日１枚シールが張れるよ。この表がいっぱいになったら、ごほうびあげるよというと、頑張ると言ってくれました。週末、Ａちゃんと松ぼっくり拾いをしました。合計１００個集めて、松ぼっくり拾いは、学校に行くときじゃなくて、休みの日にしようねと約束しました。

６月に個人面談がありました。先生から授業中、おしゃべりをしない、甘えないはとても頑張っていますと報告を受けました。ほっとしたのも束の間、授業中、Ａちゃんは当て

ても、当てても手を挙げるんです。とてもいい回答をしてくれるのですが、ほかの子を当てると、ああっと残念がって、がっかりする声がやはりうるさいそうです。手を挙げて当てられなくともがっかりしないは、私と練習をしました。私が先生役で、「はい、この問題分かる人」と聞きます。Ａちゃんが手を挙げても当てません。「はい、Ｂ君」と当て、Ａちゃんを見つめ、Ａちゃんがっかりしないよと言い、表情をチェック、オーケー、ということを繰り返しました。すると、Ａちゃんは、「先生が心トークを教えてくれたんだよ。声には出さないで、心の中で言うの」。先生もよく分かってくださっていました。

ちなみに今の課題は、お友達に注意しないです。「学校で注意するのは先生だよ。先生の役目だから、Ａちゃんは注意しなくていいよ」と言っています。Ａちゃんが学校から帰ってきて、報告してくれます。「お母さん、今日こんな悪いことした子がいたんだよ。でも、私注意しなかった、先生怒っていた」。「Ａちゃん、約束守ってくれてありがとう、お母さんうれしいよ。ごほうび表にシールを張ろうね」と言って、ぎゅっと抱きしめます。

Ａちゃんは、夫の両親に初めて会ったときから、おじいちゃん、おばあちゃんと言ってなついていたので、両親のほうも、孫同然に接してくれます。両親は里親をすることに、初めから賛成ではありませんでした。苦労するのではと心配していました。でも会ってみたら、Ａちゃんをみんなで育てていこうねと、とてもかわいがってくれています。

子供の成長には、家族以外の人とのふれあいが必要です。そういう意味では、里親子の私たちには、たくさんの心強い味方がついています。学校や地域以外にも、児童相談所の方々をはじめ、里親仲間、施設や支援機関の方々、みんな温かい思いでつながっているので、安心して子育てができます。子供の居場所をたくさんつくり、その中で伸び伸びと成長してほしいと思っています。里親仲間との交流は、月１回あります。４０代になって、楽しい仲間に出会えたことは、里親をやってよかったことの一つです。子どもたちが楽しみにしているクリスマス会などのイベントもあります。

里親になって、家族みんなたくましくなりました。腹が立って怒ることもあるけれども、大笑いすることも増えました。Ａちゃんが生まれながらに持っている気質は、私たちにはないもので、きらきらして見えます。以前、Ａちゃんに、「お母さんお腹の中にいたとき、どんな気持ちだった？」と尋ねてみたら、わくわくしていたとの答えが返ってきました。いつも楽しいことに目を輝かせているので、その答えには納得です。Ａちゃんのわくわくに便乗して、私たちも日々を楽しんでいきたいと思っています。今日をきっかけに、皆さんの家にも、家族が一人増えることを考えてみていただけたらうれしいです。

１０「養育家庭が寄り添い続けた時間・子どもの大きな成長」

発表者：里親（６０代女性）と元委託児童（２０代男性）

家族構成（当時）：里親、委託児童（実子、委託児童）

里親宅で過ごした期間：１歳～１８歳

２００１年に里親になったきっかけは、長男が、弟が欲しいと言い始めたことでした。ですが、思うようにはならず、その頃、市のチラシでフレンドホームというものを知りました。フレンドホームは養育家庭とは少し違い、週末に施設のお子さんをお預かりして、家庭で過ごさせるというものです。施設に電話をすると折り返し、養育家庭という里親になる気はありませんかとお話をいただきました。里親がどのようなものかも分からなかったのですが、長男と一緒に遊んでくれる子がいたらいいなという思いがあったので、里親に登録するように手続きを始めました。

登録した翌日に、やっと歩けるくらいの子の写真が来ました。数日後、乳児院に伺うと、ほとんどしゃべることもせず、保育士さんに抱かれている男の子がいました。その後程なくして、我が家の家族になりました。委託後は夜になると泣いて、すやすやと寝たかなと思うと起きてしまうような毎日でした。その後はリビングの隣に長男と川の字で寝るようなことを３か月くらい続けました。それからは、本当に元気な男の子に育ってくれました。

現在の状況ですが、高校１年生の男の子がいます。思春期のため、大変なときもありますが、寝顔を見ると、私が諦めてしまうのか、そういった大変さを忘れられる気がしています。

【元委託児童】

私は現在大学４年生で、今年２２歳になりました。大学は薬学部の創薬科学科という学科に通っています。薬学部というと国家試験を受けて薬剤師になれる６年制の薬学科をイメージする人も多いと思いますが、その学科とは違い研究などに力を入れたい人が通う４年制の学科に通っています。なので、今年度で大学は卒業になります。卒業後は同じ大学の大学院修士課程の薬科学専攻に進学します。

里子としては、高校卒業と同時に措置解除となりました。大学が里親宅から遠いので、一人暮らしを始めることになりました。

今回お話しする内容ですが、項目を三つに分けてお話ししたいと思います。まず、養育家庭に委託された経緯、次に養育家庭で育ってよかったことや困ったこと、その率直な気

持ち、最後に現在それらについてどう思っているのかになります。

まず、養育家庭に委託された経緯ですが、正直当時の記憶は全くありません。今回体験発表するに当たって母から家に来るまでの経緯を聞いたので、それを共有したいと思います。初めて会ったのが２００１年３月の乳児院で、当時の年齢が１歳１０か月。当日兄は私を喜ばせようとだまし船の折り紙を折って持ってきてくれたようです。それを今朝、兄に尋ねたところ、本人は覚えていませんでしたが。その後乳児院の近くの公園で遊びました。委託前にはお泊まりがあって、ベビーカーで電車に乗って、家族と一緒に家に向かいました。当日の写真を見ましたが、おでこに湿布を貼り、風邪をひいてる感じでした。乳児院に戻ったときも、職員さんに抱かれて、もう一回一緒にお出かけすると泣いたとのことでした。今思うと一緒の生活が当たり前なので、正直に言うと昔の話を聞いても実感がわきません。私が家に来たときは、両親と兄、祖父母がいて、６人家族でした。そのときが２歳直前、そこから一緒に暮らし始めました。

それ以降のことは結構覚えていることも多く、幼稚園の頃は、とにかく祖父がかわいがってくれました。毎日毎日近所を散歩し、私が少しでも疲れたというととおんぶしてくれました。今思うと、大変なルート、家の周りから歩いて何キロというレベルで、本当に愛情深く祖父が面倒見てくれたなと感じます。そんな祖父の一番印象深かったことは、私が年長までおんぶを卒業できずにいると、小学校の入学式の前日に、小学生になるんだからおんぶは今日で最後だよと約束をして、そこからおんぶを頼まなくなったということです。すごく印象に残っていて、それがひとつ、大きな成長になったきっかけかなと思っています。今でも、祖父の印象として、たばこを吸っていた姿があります。その匂いが祖父のイメージというのがあり、いまだにたばこ自体は得意じゃないですけど、匂いは好きです。

養育家庭で育って思ったことなんですけど、里子ということを実感する機会は、育て方がよかったのか、ありがたいことに殆どありませんでした。幼稚園に４年通い欠席は１日で、結構丈夫に育ちました。私が元気なのは産んでくれたお母さんが丈夫な体に産んでくれたからだよと母は事あるごとに言ってくれたので、産んでくれたお母さんが別にいるということは、疑問に思うことなく受け入れていました。

名字については、何かきっかけがあって言われるというより、幼い頃から戸籍上の名字があるんだよというのは言い聞かされていたので、すごくよかったなと思っています。家族はもちろん周りの人たちも通称名で関わってくれていました。里子としての違いを実感したのは、戸籍の名前で発行される卒業証書などです。小学生の頃などは、母が学校との

やり取りをしてくれていたので、自分でそれらの手続きに関わることはありませんでしたが、高校では、大学入試や奨学金等の申請などを戸籍名でしなければならないので、その際には戸籍名を書きました。私は、戸籍名と通称名とをきっぱり分けて考えていたので、センター試験でも、戸籍名を書くだけなのにと思っていました。母は心配だったみたいで、入学試験の随分前から、「戸籍名を書くのに慣れてないから、今から練習しておかなくて大丈夫なの」と言ってくれましたが、すでに自分の中では切り替えができていました。他には高校の卒業式で、担任の先生が配慮してくださって、卒業証書を手渡されたその場ですぐ筒にしまう形にしてくれました。大学についても、通称名で通えたらいいなと思っていました。大学の入試自体は戸籍名で受けましたが、入学前に書類を提出して、学生証などは通称名になるようにしてもらっています。そういった手続きに関わるようになってから、名字について考えることが多く、アイデンティティーの確立につながったと思っています。

困ったことで言うと、中学、高校で受けた英検、ＴＯＥＩＣ、漢字検定などは全て通称名で受けているので、戸籍名で就職活動を行う場合、例えばＴＯＥＩＣの点数証明の名字を変更するといった必要があるかもしれません。もし、外部の大学院に行くときは、大学院に、問い合わせたりすることも必要になると思います。

私は２歳から家にいたので、この家の人という意識が強いです。今考えているのは、里親の姓に変更したいと思って色々調べています。産んでくれたお母さんとのつながりが全くないわけではありません。それまで特別考えることもなかったのですが、１８歳のときに産んでくれたお母さんの署名と印鑑が必要で、児相の方を通して連絡を取ってもらい、実際に会いました。そのときに、預けたときの気持ちなどもとてもフレンドリーに話してもらいました。

あと、コロナで遅くなりましたが、２１歳のとき乳児院に成人の報告のため、伺いました。当時のお話や、私を担当してくれていた方が写真をたくさん持ってきてくれて、お手紙もいただきました。たくさんの方の支援があって、今ここまで成長することができたと思っています。

【里親】

先程から横に座り、ドキドキしながら見ていました。でも意外に話せたのかなという思いと一緒に、あの甘えん坊がここまで成長したことに驚きもあります。そしてこの成長は

周りの皆さまのおかげと感謝しています。

これからの心配は名前の問題が一番と今は感じています。お預かりしたときには何の考えもなく、通称名にしてしまいました。この子が成長するにつれて、社会的に、他の方と関わることが多くなると、どちらが良かったのだろうと思います。小さい頃ですから本人にも聞けず、通称名を選びましたが、今、通称名を戸籍名にしたいとなると、手続が大変で、私たち素人にとってはかなり大きな山になっています。

一番早いのは養子縁組ですが、社会的養護の子というので奨学金などをお借りしていますし、色々な問題が出てきてしまっていて、まだ道筋がわかりません。これからは、この子がどうやって生きていくのか、将来に関して名前は、大切なものと再確認しています。

実子であれ里子であれ、子供は自立していくものなので、自立しても一時期一緒に暮らした家族として、これがずっと続いて欲しいと思っています。「これから帰る」と当たり前のように言うのは、我が家が、実家なのでしょう。同じようにあと一人、高校１年生がいますので、その子にも同じように実家と思ってもらえるよう、日々過ごしています。

１１「 里親になれた喜び 」

発表者：里親（５０代女性）

家族構成：里親、委託児童（４歳男の子Ａ君）

里親歴：１年半

私たちは結婚が遅く、不妊治療を続け、その後、特別養子縁組も考えましたが、当時の年齢制限で申請することができませんでした。そのときに養育家庭のことを知りました。体験発表集を読んで、試し行動や赤ちゃん返りという言葉を目にして、子育て経験のない私たちにできるだろうかと、そのときは踏み出すことができませんでした。数年してから新聞で私たちと同世代のご夫婦が幼児を育てているという記事を読みました。まだ、私たちにもできるかもしれないと思い、主人と相談して、里親になってみようと決意しました。

その後、里親になるための研修や実習を受けて、里親として登録されました。登録と同時に子どもの受託に備えて勤務形態を変えました。子どもが紹介されるまでの間はとても長く感じられましたが、研修にできるだけ参加して子育ての知識を得たり、先輩里親さんのお話を聞いてイメージを高めていきました。そして、いよいよＡ君が紹介され、乳児院での交流が始まりました。初めは手をつなごうとしても、つないでもらえず、抱っこもさせてもらえませんでした。でも、面会が週に２回、３回、４回と増えていき、Ａ君について知ることもだんだん増え、徐々に距離を縮めていくことができました。

Ａ君はとても好奇心旺盛な男の子で、乳児院の水道を出したり閉めたり、部屋の廊下と階段を仕切るドアを開けたり閉めたりしていました。物の仕組みが大好きで、研究熱心でした。保育士さんが必ず、Ａ君の気持ちを聞いてから穏やかに次の行動を促されていて、交流期間は子どもとの関わり方を知るとても貴重な期間だったと感じています。そして、Ａ君が乳児院で大切に大切に育てられて来たことを肌で感じ、このバトンをしっかりと受け継いでいきたいと思いました。

初めての日帰り交流で、我が家に来るとき、保育士さんの名前を弱々しく、泣いて呼びながらも車に乗ってくれました。夜寝るとき、まるで身の置きどころがないかのように部屋の中をぱたぱたと歩き回って、寝た後も、「みんないない、みんないない」と、何度も何度も起きてとてもいたたまれない気持ちになりました。主人と代わる代わる抱っこして、寝つかせたのを覚えています。まだ３歳に満たないＡ君が新しい場所で生きていくことに心を揺らして、それでも頑張っている姿を見て、本当に温かく迎えしっかり気持ちを受け止めてあげたいと感じました。

それから、長期の宿泊交流になり、ジェットコースターのような日々が始まりました。いわゆる試し行動や赤ちゃん返り、２、３歳なのでイヤイヤ期もあり、嵐のような毎日になりました。毎晩、Ａ君が寝てから夫婦で作戦会議をしたり、里親支援専門相談員の方に相談したりして、早くＡ君が安心して、落ち着ける方法を考えました。家にあるものを何でも触りたくて、口にも入れてしまうので、家の中の扉などにチャイルドロックを付けたりという室内の環境を主人が整えていってくれました。

交流中はちょうどコロナの第一波と重なってしまい、児童館や図書館などが、閉鎖されていました。自転車であちこちの公園に出かけて外で体を動かして遊びました。まだ、家族の概念が持てていないようで、公園の砂場で隣にいる女の人にいきなり話しかけたり、全然知らない女の子たちの中にどんどん入っていき、驚かれることもありました。社交的なところは大切にし、人との距離感は成長とともに身につけていってくれたらいいと思っています。

Ａ君は私の両親や妹家族、主人の姉の家族にも、かわいがってもらっています。おばあちゃんのうちでは何でも触りたい放題で、びしょ濡れになって、皿洗いをさせてくれたり、ミシンも使わせてくれたり、叱らないで見てくれるので、Ａ君も「おばあちゃんち行きたい」とよく話しています。保育園に入るとお友達もできて、ブランコや滑り台も上達しましたし、幼稚園に入ると今度は、男の子らしく悪い言葉も覚えて、順調にやんちゃぶりを発揮しています。

子育て経験がないことが不安でしたが、試し行動や赤ちゃん返りも理由がわかれば対応の仕方があるとわかりました。感情を体当たりで示してくれることも、私たちを信頼して、甘えてくれているからだと言ってくれた人もいます。大変だと思っていたことのほとんどが里親だからではなくて、子育てそのものだというのが実感です。子育てを来世の夢だと諦めていましたが、今、子どもとの豊かでかけがえのない時間をとても幸せに感じています。コロナ禍で人との交流が難しい時期ですが、里親には里親仲間というネットワークがあり、児童相談所をはじめ関係機関の方々が支えてくださるということが強みだと感じています。まだまだ駆け出しの里親で、途中からの養育での大変な面もありますが、その分、家族になっていく過程が味わえるという醍醐味があるのかなと思っています。これから子どもの成長とともに難しいこととか大変なことや悩みも出てくると思いますが、肩の力を抜いて、子どもとともに成長していきたいと思っています。

１２「 帰ってくる場所になれたら 」

発表者：里親（５０代男性）

家族構成：里親、実子（中学１年生女の子）委託児童（小学１年生女の子）

里親歴：４年

里親になったきっかけからお話ししたいと思います。私たちは、結婚はちょっと遅かったので実子を授かるのもすごく苦労して、不妊治療して、ようやく一人授かりました。何とか二人目が欲しいなと思って、ずっと不妊治療していたんですけど、出口がなくすごく苦しんでいる日々でした。そのときに、コンビニの駐車場で、養育家庭の話をしているラジオを偶然聞いて、何かそういう手もあるなと思ったのが本当のきっかけです。妻がちょうど買い物から戻ってきたので、こういうのがあるらしいよという話をしたら、ありだねということで、何かちょうど我々も不妊治療の出口としても、よかったのかもしれないんですけど、話聞いてみようかということになりました。

その頃に、ちょうど、事故で若い親族が亡くなるということがあり、やっぱり一人で生きているんじゃないと再確認して、困っている子供がいて、我々も、もう一人子供が欲しいなと思っていて、その子の助けになるのなら里親制度の研修を受けてみようという流れで、本当に基礎知識もなく始めました。

子供をもう一人育てたいというほうが我々の気持ちにちょっと近かったので養育家庭というのを選んで、研修を受けました。夫婦二人で行って、座学研修を受けたり、グループワークをしたりという研修でした。真実告知をしなきゃいけないんですよという話は、初めて知って、もし小さい子を預かったら、そうか、真実告知するのかみたいなのは、とても印象に残っていたのを覚えています。座学の研修が終わると、今度、養護施設のほうで施設の子供たちのお世話をする、手伝いをするような研修でした。行ってみると、子供たちが遊んでいて、それを一生懸命サポートしたり、あとは学校に行っちゃった後は、しーんと静まり返った中で、実情を教えていただいたりしました。

子供も好きなので、男の子たちと一緒に園庭で遊んだりして、わいわい遊んで、ああ、子供たちも喜んでくれたなと思って、帰ったんですけど、後であまりに楽し過ぎて、子供たちが情緒不安定になって大変だったと聞いて。そのときに初めて聞いたお話で、施設にいる子供たちというのは、夜おやすみなさいという人と朝おはようございますという人が違う人なんですって。あ、なるほどと。子供たちにとってはすごく重要なことなんじゃないかななんて思ったのを思い出しました。

研修が終わって、里親として登録された後は、里親を探している子供たちと面談したり、会ったりして、本当に預かれるかどうかみたいな確認をします。実際は、結構慎重に何か月もかけて、交流期間を重ねるらしいんですけれども、今回、私の場合はちょっと異例だったようで、初めて会ってから、多分１～２か月でもううちに来るということが決まったという経緯があります。

当時、２歳半ぐらいの女の子だったんですけど、一時保護所というところにいて、その子と会ってもらえないかという話をいただきました。実子が女の子なので、できれば、女の子の年下の子がいいなと思っていたので、会いに行きました。妻は、ちょっとでも気に入ってもらおうと、指人形とかを買って持っていったんですけど、その日は、交流する部屋の中でギャン泣きしてずっと泣いていて、隣の部屋でずっと僕たち待っている感じでした。ようやく泣き止んでちょっとだけ交流したんですけど、全く無表情で、にこりともしないのが最初の交流の経験でした。ちょっと妻と私は完全に自信を喪失して、あ、これは無理かなと言いながら帰ったのを覚えています。

そこで無理とも言えないので、今度は公園に行きましょうみたいな機会があって、そのときは妻が来られなくて、僕だけで公園に行って、１回目よりは少し楽しく遊べたんですけど、相変わらず僕とは遊んでくれなくて、様子を見ているみたいな感じでした。帰りに、何か間違ったのか分からないですけど、歩いているときに、指を握ってくれたんですね。それがすごくぎゅっと握ってくれたのが、僕の中では、あ、この子を預かろうと決めた瞬間で…。もうその瞬間に僕は決めちゃいました。妻も、それに賛成してくれたので、すごく異例の速さで預かるということが決まりました。

家族や親族の皆さんへの説明を特にしてなかったので、実家の僕の両親とかがどう思うのかなとか、何かその辺は、いざ預かると決めてから、あ、言ってなかったなみたいな感じだったので、進められるときには早くお話ししたほうがいいかもしれないですね。幸い、うちは大変そうだけども、頑張ってねみたいな形で、今でもじい、ばあとして、協力してくれています。

里親になると、実子と同じくずっと生活するので、時々預かってくれるというレスパイト・ケアという制度があります。例えば、うちは実子がピアノの発表会に行って、朝から晩まで一緒にいなきゃいけないとかというときに預かってもらっています。ちょっと、もう疲れたので休みたいというのでも、多分いいと思います。預かってくれる先は、同じ区の先輩里親さん、さっき動画にあったような大先輩の里親さんたちが預かってくれるので、

本当に近所のおばちゃんみたいな形で預かってくれて、子供も喜んで行ってくれるので、気兼ねなく使わせてもらっています。行き詰まったら、レスパイトもあるよというのを覚えておいていただければなと思います。

あとは、結構反抗期が激しくて、本当に嫌々で、１回嫌になると、泣くまで止まらないみたいなキャラを持っています。実子がそれほどでもなかったので、そのギャップにすごく困ったりしました。それでもお姉ちゃんからお菓子分けてもらったとか、お姉ちゃんと遊んだよと嬉しそうにしゃべっていて、やっぱり家で家族と一緒に暮らすというのは、価値があるのかなと思いながら、この子の優しさはちゃんと個性として伸ばしてあげたいなということを思っております。

あとは、さっき少し触れた真実告知の件ですね。真実告知を最近しました。児童相談所の皆さんに協力していただいて、児童相談所の方が絵本まで作ってくれて、産んでくれたお父さんとお母さんがいてね、とても大事にしてくれたんだけど、事情があって暮らせなくなったから、今のお父さんとお母さんのところで暮らしているんだよという感じの絵本です。それをわざわざ児童相談所の人が作ってくれました。その後、どうなるかなと、何か情緒不安定になったりするのかなと思って、すごく身構えていたんですけど、今のところ、多分あまり半分も理解できていないような感じで、けろっとして帰ってきていて、何度か同じその絵本を基にお話をしないと理解できないんだろうなというのが、今の現状です。理解したときに、どういうリアクションになるかは分からないんですけど、それでも一緒に暮らしたいなと言ってくれればいいなというふうには思っております。

いろいろつらつらと話してきたんですけど、里親になって、失うものといったら変ですけど、失うものとか、得るものって、どんなものがあったかなというのを、この４年間の一人だけの経験ですけれども、お話ししてみたいと思います。

一番大きいなと思ったのは、実子のストレスですね。生まれた赤ちゃんから一緒にいるわけじゃなくて、うちの実子の場合は、７歳か８歳ぐらいのときに、突然、２歳半の子がポンとうちに来ました。初めは、妹ができたとすごく喜んでいたんですけど、だんだん仲も悪くなったり、けんかもしたりということが増えてきました。ちょうど去年まで実子が中学受験していたもので、そのストレスもあって、もう本当に荒れて、我々にも当たるんですけど、下の子にも当たっちゃって、一時は、もう本当に、１回返そうかぐらいまで追い込まれた時期もありました。何とか児童相談所の方々のサポートもあって、乗り越えました。実子のほうがすごくストレスを感じていたので、児童相談所の方が実子のほうのカ

ウンセリングを定期的にやっていただいたりして、カウンセラーと話すと、実子も少しにこにこして帰ってきました。そういう意味でも、これまでの人生で児童相談所の方と、関わりなかったので知らなかったんですけど、頼ってみるといいなと思ったことを覚えています。

あとは、それほど二人子供がいるということと、違いはないなというふうに思っています。上の子が中学生なので、もし小学校１年生の下の子がいなければ、そろそろ旅行に行ったり、いろんなこともっとしやすいだろうなとは思うぐらいで、年の離れた二人の子供がいる普通の家庭と何ら変わらないなとは、今のところは思っています。真実告知が終わった後の思春期の頃とかにどうなるかというのは、ちょっと僕も分からないので、先輩里親さんとかのお話も聞いていただけたらいいかなと思います。

一方で得られるものは、僕たちにとってはすごく大きくて、社会への効力感です。虐待のニュースを聞いて、何とかならないものかと思っていましたが、実際できることは何もなくて、ただただ無力感みたいなのがありました。たった一人ですけど、親と一緒に暮らせない子供を１５年間育てるということが自分たちの精神安定にもなり、社会への参加意識にもなるという意味ではすごく嬉しいなと思っていますね。

それから、先ほど少し先に話しちゃいましたけど、児童相談所の方の支援も助かっていて、実子のカウンセリングの件とか、本当に助かっています。

あとは里子の成長ですね。これが一番得られるものとして大きくて、上の子は中学生の女子なので、ほとんど一緒に遊んでくれないんですけど、まだ小学校１年生の下の子は学校から帰ってきたら、「今日はあのね、学校でね」と言ってくれたり、自転車乗れたというと、ハイタッチしたりというのができているのは、里子と一緒に暮らす一番のメリットかなというふうに思っています。ですね。

じゃあ、最後に、これはご存じの方もいるかもしれませんが、うちの娘が大好きなＳＥＫＡＩ　ＮＯ　ＯＷＡＲＩというグループの「ＲＰＧ」という曲の一節なんですけど、うちの里子がこの家をいつかは卒業すると思うんですけど、そのときに、こんな気持ちで卒業してくれたらいいなというのがちょうどぴったりだなと思って、最後にご紹介しました。

何かさっき、里子ちゃんが帰ってくるお家みたいな動画がありましたけど、１８歳になって、家を卒業したにしろ、家でもっと暮らすにしろ、帰る場所として、一人じゃないんだなと思ってくれたら、里親冥利に尽きるかなと思っております。

１３「 数か月間の里親委託で変わったその後の生活 」

発表者：元委託児童（３０代男性）

家族構成（当時）：里親、委託児童

里親宅で過ごした期間：高校３年生の秋～卒業まで（約１６年前）

まずは、僕の実の親の家庭環境を含めた簡単な自己紹介をさせてもらって、その後に里子になるまでの期間、どういう生活をしていたかというところと、すごく短かかったですけど、里子の期間の話と、最後のほうに里子になっていたときにどういうふうに思っていたかとか、振り返ってお話しできればいいかなと思っています。

僕の実の親の家族構成ですけれども、シングルマザーで男三兄弟の長男ですが、全員父親が違うという家庭で、最近知ったんですけど、自分の実の父親というのは、数年前に亡くなっていました。物心つく頃には身近にいなくて、僕自身も父親の記憶はないというような感じでした。小学生の頃は特に生活が安定していなくて、卒業するまでに４回ぐらい転校しました。それ以降は比較的落ち着いたかなというような感じになっていて、今はもう自立して、おおむね安定した仕事を１０年ほど続けているという感じになります。

僕は物心つく前からシングルマザーの母親から、いわゆる身体的虐待をずっと受けていて、中には救急車で搬送されるようなこともありました。物心ついてからは小学校には通わずに、僕は深夜まで家事をしたりして過ごすことが多かったと思います。そんな日々が続いて、小学校３年生の頃にあまりのしんどさに耐えかねて僕一人で突発的に家出をしました。そのときにたまたま出会った人が恐らく児童相談所関係の人で、保護されるという形になって、その後は東京都の一時保護所でしばらく過ごすことになりました。最終的に、児童養護施設に行くことになって、僕は小学校３年生から５年生の終わりまでをその児童養護施設で過ごしました。そのときは弟が二人いましたが、１個下の弟は同じ施設に来て、一番下の弟は赤ちゃんだったので乳児院のほうにという感じになり、みんなばらばらな感じで過ごしました。５年生の終わりに実家のほうに戻ることになり、実家に戻ってからは、いわゆる虐待というのはそれまでよりもかなり減って、大分ましな生活になりました。

それからはしばらく、特に大きな問題はなく過ごすことができていたのですが、高校３年生の秋頃に、決定的な亀裂みたいなものが発生しました。うちの母親が教育ママというか、ずっと本当に耳がたこができるように「おまえは東大に行ってハーバード大学に行くんだ」というような極端なことを言っていて、僕は全然興味もなかったので、なあなあで過ごしていました。そのなあなあさ加減にうちの母親が切れてしまって、そこから、もう

自分で勝手にしろみたいなことを言われました。それまでのいろんなことも含めて、ちょっとここで暮らしていくのは無理だなというふうに自分で思って、高校３年生の秋頃に再び家出をすることになりました。考えなしに家を出たので、取りあえず友達の家に行ってかくまってもらうことになりました。最初の家出は急に出たんですけど、高校生のときの家出はもう宣言というか、「もうここでは暮らせないから出る」というのを母親に直接伝えて出ました。母親が自分で児童相談所に連絡して、どうするかみたいな話になりました。

ちょっと話が前後しますが、母親が切れた流れで、都立高校の残りの学費も払わないからそれも含めて自分でどうにかしろと言われました。さすがに学費を払わないと卒業できないので、当時の担任の先生が学費を肩代わりしてくれて無事高校は卒業できました。本当にありがたいことであったなと思っています。学費については、卒業後にすぐアルバイトをして返しました。

僕が家を出て友達の家に行って、うちの実親が児童相談所に行って、どうするという話になって、普通に考えて友達のところにずっといるわけにいかないので、養育家庭の里親さんにお世話になると決まりました。それが高３の秋、あと何か月で卒業というタイミングで、里子も終了というのがあって、先はもう家に戻るか、自分で何とかして生活するか。でも、１８歳だから自分で家も借りられないんですね。ただ、もう基本的にどん詰まりというか、どうしようもない感じではあったんですけれども、そのときの里親さんがたまたま集合住宅を経営していらっしゃって、特別にその１室を借りさせてもらうことができて、成人するまではそこで暮らさせてもらいました。もちろんアルバイトして家賃とか払いましたが。そこで無事、成人を迎えて、改めて自分で別のアパートを借りて、その里親さんの元を離れて今に至るというような感じになっています。当時の里親さんや、それこそ当時の担任の先生とは、今も良好な関係を築けていると僕は思っています。

自分が里子でいた期間について、それから自立するまでの期間については、半年もないかなというぐらいの感じだったので、あまりメジャーなほうではないんじゃないかなとは思いますけれども、その上で僕のケースをお話しします。当時は措置の延長という制度がありませんでしたが、たまたま里親さん所有の集合住宅で生活させてもらうことができたので、里子の期間と、成人するまでもほぼ変わらない感覚でした。結局、成人するまでは自分で何かの契約をすることもできないでので、ほぼずっと里子の感覚でした。その間、本当にずっと密にやり取りをし、一緒にご飯を食べさせてもらったりという環境をずっと続けていました。その間に新しい里子が何人かいたりして、もうその里子の子たちとも、

一緒に暮らすというわけじゃないんですけど、関係がありました。あとは里親さんが外国人のホームステイもやっていたので、里子の子たちと出会ったり、ホームステイで来た外国人と出会ったりというような感じで、いろんな人と出会うことができて、それはそれでよかったなというふうに思っていますね。

僕は多分里親さんとうまくいったほうのケースだと思うんですけれども、全員が全員うまくいくわけじゃありません。僕の後輩の子たちも、やっぱり相性の問題とかが結構あったりします。僕は微妙な立ち位置で、里子の先輩というか、新しく来た子に関しては、里親さんがいて、僕が元里子で身近にいてという感じで、両方の話を聞くという機会が結構多くて、どっちの言い分も、もちろん分かるし、だから難しいなというのが率直な感想でした。やっぱり里子になるような子供というのは、いわゆる普通の環境ではないというのが前提にあって、そういう子供たちが大人になったときに困らないように育ててあげたいというのは、出会う里親さんみんながそういうふうに思ってくれているんだなと僕は感じました。ただ、子供のときにそれを理解し、素直に受け止めることというのはなかなか難しいのかなと思いました。

あとは、里子の特殊な生い立ちゆえに、なかなか新しい家庭環境になじめないということも少なくなかったのかなと思いますね。ある意味では、当然だと思いますけれどもね。そういうのを見聞きしていて、僕もまだ１８歳とか１９歳だったので大した人生経験もなかったですし、今だったらもうちょっとましなことが言えそうな気がしますけれども当時は、結構歯がゆい思いでした。実の子ではない子供を育てるとか、育ててもらうとかというのは、やっぱりすごく難しいんだなと感じました。必ずしもうまくいくとは限りませんが、少なくとも僕自身はこの制度があって、とても助かりましたし、ありがたかったです。

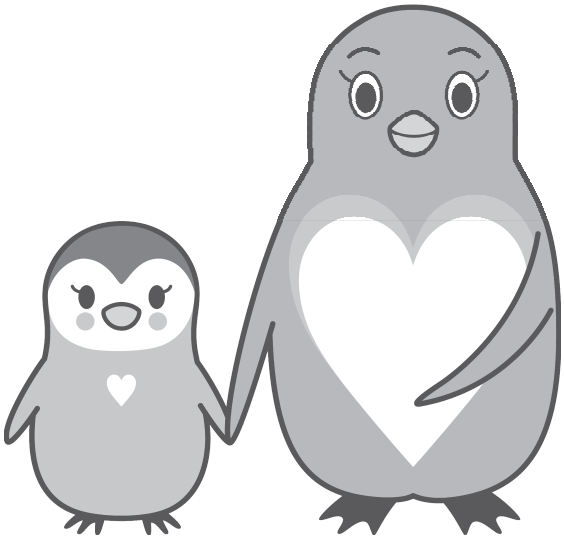
ただ、先ほども言いましたように、里子を受け入れた上で、うまくいくかは里子の年齢とか性格にもよってくると思います。とても難しいんだなと感じることがとても多かったように思いますね。これは、もちろん里親さん側の性格とかにもよってくると思いますけれども。ただ、世間一般の里子というのは、僕は全然知らないので、僕の知っているケースが普通かどうかも全然分からないんですけれども、僕が見てきた中で、うまくいく子供というのは、なかなか子供とは思えないようなメンタリティというか、老けて見るような子供のほうが少なくとも表面上はうまくいくことが多いんだなという。正直に生きているような、そういう環境の子供というのは、やっぱり難しいのかなと思いました。

あとは、これはあまりいい話ではないのかもしれないですけれども、僕の単純に思った

感想として、里親さんというのは、衣食住を提供してくれる、保護監督者であるんだなという、親ではないんだなというのは感じましたね。それがいいとか悪いとかということではないと思いますし、単純に僕がもう結構年齢がいっていたというのも大きかったと思いますけれどもね。何度か当時は里子の集まりというのに参加する機会がありましたが、その特殊な生い立ちのせいなのか、なかなか難しい性格で、うーんというふうに思わざるを得ない子供というのが多かったりしたので、もちろん普通の子でもそういう子供はいると思いますけれども、そういう子供を引き受けて育てていくというのは、並大抵のことではないのかなというふうに思いましたね。これは本当に難しいなと思って見ていました。

最後に、最近は昔よりも虐待を受けて死んでしまう子供とかのニュースが増えてきたように思います。やはり自分としては自分の経験がゆえに、そういうニュースはどうしても自分と重ねて見てしまうので、もしかしたら自分が死んでいたのかなというふうに思うと、本当に何とも言えない気分になります。本当にそういうニュースは見たくないですが、自分にできることは、現状は多分ないと思います。

児童相談所や里親さん含めて児童福祉に携わる人には、そういう子を一人でも多く救ってもらえたらありがたいなと僕は思います。なかなかそういうケースの子供から感謝されることはないかもしれないですし、実際に本人がどう思っているのか、もちろん分からないんですが、少なくとも僕はとてもありがたかったなと、生まれてきてよかったなと思えているかどうかは、ちょっとまだ自分では分からないですけれども、少なくとも今生きられているのは里親制度があったからというのは間違いないので、そういう意味では本当にありがたかったなというふうに思っています。



１４『初めての里子を迎えて』～家族と共に成長しています～

発表者：里親（４０代ご夫婦）

家族構成：里親、実子（１９歳、１７歳、１５歳）、委託児童（２歳Ａ君）

里親歴：１年半

【里父】

委託児童２歳のＡ君の今朝の最新情報をお伝えすると、初めておまるでうんちをすることに成功しました。「よかったね」と、みんなで褒めたら、「完璧だね」と笑顔で答えてくれました。みんなで大笑いで、こんなふうに楽しい日々を過ごせています。

Ａ君は、実親さんが病気療養中で、育てる意思はあるけれど、今はちょっと育てられないということで、うちで預かっています。病気が快復次第、実親さんのもとで育てたいということなので、もう既に面会交流も始まっています。すごく今、楽しい日々を送りつつも、いつかは別れがくるんだなということを思いながら過ごしています。

登録の動機についてお話しします。夫婦それぞれがたまたま見たテレビ番組がきっかけでした。ふとした会話で、「実は興味があるんだけど」、「えっ、お前も！？」みたいな感じで、本当に偶然です。実子が３人いますが、子育てが大体一段落したところだったので、いろいろ資料を調べたり、こういう説明会に来て、里親さんの話を聞いたりしました。決め手はタレントのサヘルローズさんの講演でした。戦争でご両親を亡くされて、自身が里子として育ったというお話を聞き、背中を押されて、登録をすることにしました。

登録後、すぐに、紹介してもらったのが今お預かりしているＡ君です。もう我々の面会交流が始まったときは、コロナ禍も始まっていたので、部外者が小さいお子さんがたくさん暮らしている乳児院に行くというのは、とても気をつかいました。会いにいくときは絶対に熱を出さないように、健康管理にとても気をつかって会いに行ったのを覚えています。

初めて会いに行ったときは、私たち以外に、児相の方もたくさん来てくださって、大勢で行きました。そうすると、乳児院のお子さんたちというのは、結構わーっと集まってきてくれて、初対面なのに一緒に遊ぼうとか言ってくれるのですが、Ａ君だけは、すごく距離をおいて、普段はすごく人懐っこい子だと聞いたのですが、こちらが注目し過ぎているのが伝わったせいか、逆に避けられてしまって、あまり会話ができなかったのを覚えています。

コロナ禍のため、行ったり来たりを繰り返すのもよくないと、何回かの面会の後、もう、えいやで、我が家に来てもらうみたいな、イレギュラーなケースだったと思います。

【里母】

先ほど夫が言いましたとおり、実子が３人いて、２歳ずつ年の差の実子の子育ては、夢中で育てていたような気がします。３人も育てたので、熱とか、病気などに関しては一通り経験しているので、うろたえることもなく、今できているのかなという気はします。でも、子育てというのは、子供の数だけ違うと思っています。今現在、うちのＡ君は、外出先でも疲れてしまうと、靴を脱いで、嫌だ嫌だと暴れたり、実子では体験したことないんですが、そんな感じで困らせることも結構多くて、ちょっと驚きの毎日です。

里親を始める前に、里子だった方の体験談で、「自分にとって里親さんというのは、自分だけを見てくれる存在で、嬉しかった」というのを聞いたことがあります。乳児院でＡ君は、すごく大切に育てられてきたんですけれども、職員さんがいつも付きっきりというわけではないですよね。なので、我が家に来て、しばらくＡ君は、にこにこ、姉なら姉に、兄なら兄にくっつくと、愛想よくしていたのですけれども、最近は末っ子の娘と私を取り合うのですね。末っ子の娘は、高校生ですが、時々ふざけて抱きついてきたりするんですが、Ａ君は「僕のお母さん！」と言って、半泣きになりながら横から割り込んで、入ってきてぎゅっとするんです。

ちなみに、娘は、Ａ君のやきもちだなと頭では分かっているんですが、「私のお母さんでもあるんだけど」と言って、けんかになることもあります。そういうのを見ていると、高校生になっても、私のお母さんだよと言ってもらえるのは、母親としてはちょっと嬉しいなという気がして、そういうのを見るのは、Ａ君が来てくれたからだなんて思っています。

【里父】

家に来てからのことで言うと、愛情を試すためにすごくいたずらしたりとか、手を焼くんじゃないかと、私も心配していましたが、本当に聞き分けがよく、快食、快便、快眠で、到着してすぐにいなり寿司をぱくぱくと家で食べていました。うちは大家族ですが、別に誰が隣に来ても昼寝もするし、一切選り好みをしないので、逆に驚いた記憶があります。ところが、日が経つにつれて、好き嫌いを言うようになり、「お風呂はお父さんはイヤ、母さんと入る」とか、「寝るのはばあばがいい」とか、選り好みをするようになりました。

一番僕がびっくりしたのは、この１年数か月の間に２回、目にできものができる「ものもらい」になったんですが、初回のときは、目薬を無抵抗で点されていたのに、つい最近、もう一回、ものもらいになったときは、逃げる、泣いて暴れる、抵抗する。本当に手段を

選ばす抵抗して、二人がかりで目薬を点すような感じになっていて、それ見たときに、多分初回だって嫌だったはずなのに、そのときは感情が出せなかったのかなと。目に触られるという人間にとってすごく嫌なことですら遠慮して、我慢させてしまっていたのかなというので、すごくショックを受けました。だから、今のほうがはるかに悪ガキで手がかかるんだけれども、でも、何かそれが家族としては成長したのかなというふうに、今は喜んでいるところです。

あと、実子と一緒に子育てをするというのは結構貴重な経験だなと思っていて、１８歳の次男が隣に座って、Ａ君が御飯を食べるとき、気に入らないおかずだったから何回もフォークを落とすみたいなときがありました。そのときに、次男は目を見て、同じ目線になって、「そんなことしたらお兄ちゃん悲しくなっちゃうよ」と穏やかに叱りました。どこでそんな皇室みたいな叱り方を覚えたんだろうと。私たち夫婦は早くに子供を授かったこともあって、余裕のない子育てをしていたので、動画に撮って２０代の私たちに送りたいと思うぐらい、立派な叱り方をしていました。実子の知らなかった側面というか、子供だと思っていたところを、見直す局面が増えたというのも、里親をやってみてよかったかなというところです。

【里母】

養育し始めてから、大体半年ぐらいが過ぎた頃に、実親さんとの面会交流が始まりました。うちのＡ君は、とても規則正しい生活で、リズムを崩されるのが嫌な子なので、面会交流は、できれば午前中に済ませたいというのがこちらの希望でした。しかし、実親さんの仕事の関係で、大体午後に面会をやっております。面会のためには保育園を休ませて、午前中早めにお散歩をして疲れさせて、昼食を早めに済ませて、機嫌のいい状態で起きてもらってから、実親さんに会うようにという形にしています。面会交流自体は、今の段階では１時間ぐらいですが、仕事を休んで、１日がかりの面会となっています。面会場所も電車に乗ったりするので、Ａ君がぐずったときのことを考えて、夫や、実子たちが付き合ってくれています。

１回目の交流は、心配して、うちの娘もついて来てくれました。Ａ君と娘と夫婦４人で、桜並木をちょうど通ることができたんですけれども、その日のことというのは、忘れられないなというふうに思っています。Ａ君が来てから、保育園以外では私たちと離れたことはないので、どんな反応をするのかなとか、すごく気になって、私たちのほうが正直不安でいっぱいでした。

面会は、実親さんと私たちは絶対顔を合わせないようになっています。実親さんが先に建物に入って、私たちが時間指定で入るという形でやっています。私たちは、入口で児童相談所の方にＡ君を引き渡します。「一緒に来ないの？」という感じで、Ａ君がじっと見るんですけれども、行っておいでと送り出す感じで、エレベーターに乗っていく後姿は、いまだに忘れられないし、これは回数を重ねた今も、私のほうが泣きそうな気持ちになってしまいます。

１時間ぐらいしたら迎えに来てくださいと言われたのですが、急に呼ばれたらと考えると、遠くにも行けずに、結局、夫と娘と建物の前で、花壇のところにずっと座って待っていました。このときは誰もしゃべらないで、じっと花壇に座っていたのを覚えています。

時間になって、お迎えに来てくださいと私の携帯が鳴って、再び施設の入口に迎えに行って、エレベーターが開いた途端に、娘がすごい勢いで、児童相談所の人のところから、Ａ君を取り返してきたのは、すごくびっくりしました。帰り道、おちびさんは甘えて、歩きたがらなくて、ずっと抱っこ抱っこと言ってきました。今も私と夫が行っても、私のほうに抱っこと言ったり、とても甘えた感じでいます。何回か面会交流しているんですけれども、ちょっと変わったおもちゃがある場所という感じの認識をしているようで、嫌がるわけではなく、淡々と行ってくるという感じです。

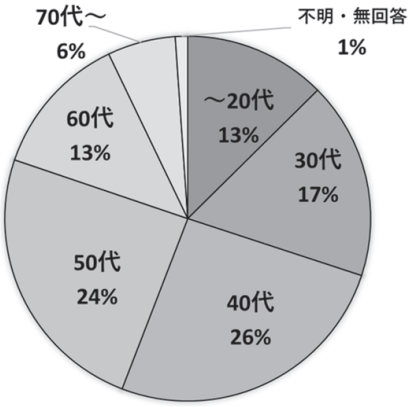
最初にお伝えしたように、Ａ君はいつか実親さんのもとに帰ります。病気のためとはいえ、こんなにかわいい子供を、里親の手に託さざるを得ない気持ちは、本当に察するに余りあるところです。私たちは、いつかは別れなければいけないということを、覚悟していますけれども、それはいつ来るのか、誰にも分からないです。母しゃん、父しゃんと言いながら甘えてきて、家族としての絆で結ばれているということを毎日感じています。わがままも含めて、最初は出せなかった気持ちをぶつけてくれる、そういった信頼関係が生まれてきて、今は毎日が楽しいです。里親１年生の私たちには、Ａ君にとって何がベストかは、本当に手探りの日々ですけれども、この子らしく、笑ったり、泣いたり、怒ったりできる環境でこれからも育ってほしいと心から願っています。

体験発表会アンケート結果

全回答　N＝915

1．体験発表会参加者について

（1）年齢構成

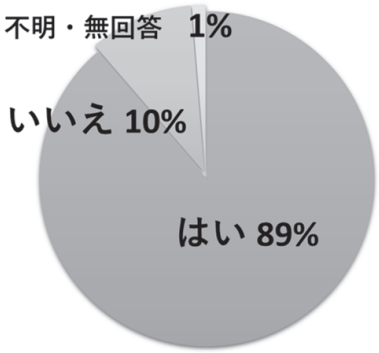


（2）所属（一部複数回答有）

（単位：人）

一般	353
民生児童委員	48
主任児童委員	29
養育家庭（里親）	82
フレンドホーム	8
都職員	21
区市町村職員	123
施設・関係団体職員	151
学生	33
その他	52
不明･無回答	18

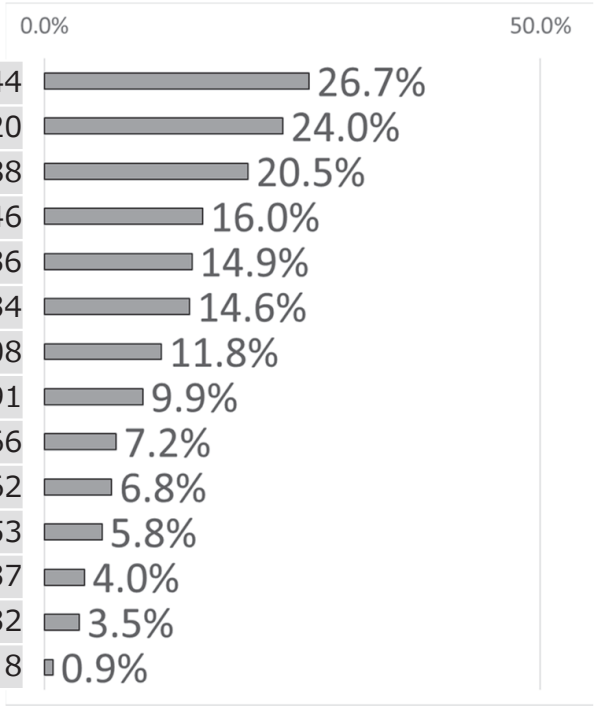
2．養育家庭制度を知っていましたか？



3．養育家庭制度を知った経緯（複数回答可）

（単位：人）

広報誌・HP	244
児相・子ども家庭支援センター	220
インターネット・ＳＮＳ	188
児童福祉施設	146
ポスター	136
その他	134
テレビ番組	108
知人・友人	91
新聞・雑誌	66
公開講座	62
不明･無回答	53
テレビCM	37
図書	32
ラジオ	8



全回答　N＝915

4．どこで、この体験発表会を知りましたか？（複数回答可）

（単位：人）

体験発表会チラシ	251	27.4%
区報・市報	220	24.0%
その他	165	18.0%
ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ・HP・ＳＮＳ	157	17.2%
過去に参加	134	14.6%
知人に勧められて	99	10.8%
ポスター	50	5.5%
広報東京都	43	4.7%
行政機関への問合せ	24	2.6%
不明･無回答	15	1.6%

5．今日の体験発表会に参加した動機をお聞かせください。（複数回答可）

（単位：人）

養育家庭制度に興味･関心があったから	510	55.7%
仕事や学問などの参考にするため	296	32.3%
子育てに関わる話が聞けると思ったから	235	25.7%
養育家庭になりたいと思っていたから	171	18.7%
その他	81	8.9%
不明･無回答	24	2.6%

6．体験発表会の感想をお聞かせください。

里親に関心がありながら、なかなか一歩が踏み出せずにいますが、いつか自分が出来ることを始めてみたいという思いが強くなりました。（40代、一般）

涙ながらに聞かせていただきました。世の中にこんな里親さんのような方がもっともっと増えれば、幸せな子どもたちが増えるので、里親制度を広めていけたらと思いました。（60代、一般）

養育家庭をやっている方のお話を聞けてとても良かったです。
もし自分が里親をやると考えてみて、１人ではなくまわりの方にお話しできたり、相談をキチンとできる体制があるんだと安心しました。（30代、施設・関係団体職員）

ご参加いただきまして、ありがとうございました！

養育家庭（里親）は、様々な理由で親と一緒に暮らすことのできない子供たちを、養子縁組を目的とせずに、家庭に迎え一緒に生活し、養育していただく制度です。

【養育家庭（里親）を、詳しく知りたい】

★　申し込み資格は？

○　都内在住の夫婦で健康な方

配偶者がいない場合は、子供を適切に養育できると認められ、かつ起居を共にし、里親の養育支援者として関わることができる、20 歳以上の親族等がいること（子供を適切に養育できると認められる特段の事情がある場合は除く。）。

○　申込者の家庭及び住居の環境が、家族の構成に応じた適切な環境であること

※その他詳しい要件は、お住まいの地域を管轄する児童相談所にご確認ください。

★　どのような子供を預かるの？

○　親の病気や虐待等の理由で、親と一緒に暮らすことができない、おおむね 18 歳までの子供です。

★　預かる期間は？

○　養育期間は数年にわたる場合もあれば、数か月など短期間の場合もあります。

★　養育に係る費用は？

○　子供の年齢に応じて、東京都から生活費や教育費等が支給されます。

○　養育家庭（里親）には、上記とは別に里親手当が支払われます。

★　養育に関して里親への支援はありますか？

○　児童相談所が中心となって関係機関と共に支援を行います。

○　里親自身の休息が必要な場合には、子供の養育から一時的に離れて休息できる制度があります。

○　里親同士が集う相互交流の機会があります。

○　経験豊富な里親が電話等で相談に応じます。

○　研修などに参加し、養育に必要な知識を学ぶことができます。

【養育家庭（里親）についてもっと詳しく知りたい場合】

お住まいの地域を管轄する児童相談所が担当になります。

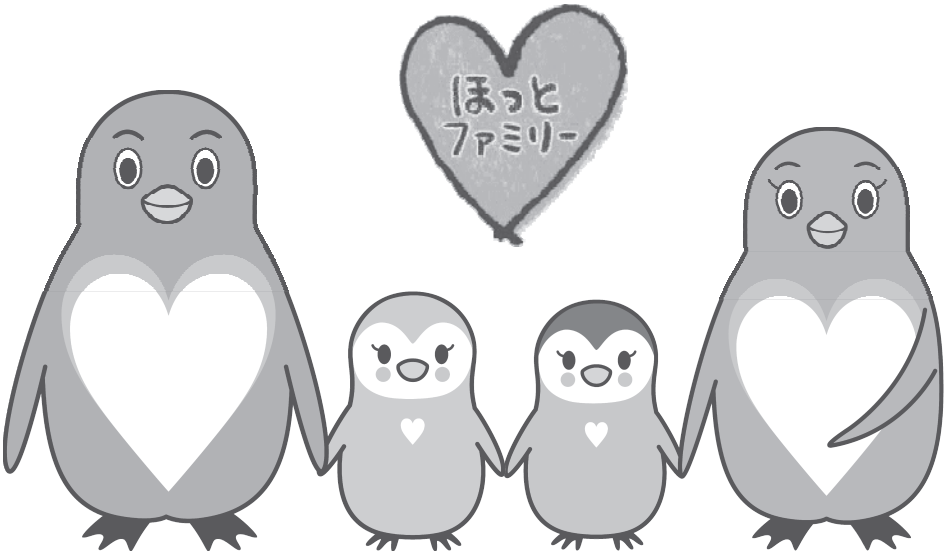
※児童相談所を設置した特別区については、区の児童相談所が該当区を管轄します。詳細は福祉保健局ＨＰでご確認ください。

【養育家庭制度に関するお問合せ先】

東京都福祉保健局少子社会対策部育成支援課里親担当

電話　０３－５３２０－４１３５

ほっとファミリーは養育家庭の愛称です。



こちらのホームページもご覧ください。

https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/satooya/seido/hotfamily/index.html

養育家庭（里親）体験発表集
令和4年9月発行

登録番号（4）136

発　行　東京都福祉保健局少子社会対策部育成支援課
東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話03（5320）4135　ﾌｧｸｼﾐﾘ03（5388）1406

印刷所　東京都同胞援護会事業局
東京都墨田区両国四丁目1番8号
電話03（5669）0261

R70
古紙配合率70%再生紙を使用しています
石油系溶剤を含まないインキを使用しています

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。